

388
295



始



388-295

旅か

田
山
花
袋

著大正
9. 6. 23
内交

目次

山の湯	一
湖上	五七
ある訪問	七一
山のロビンソン・クルウソー	一一一
出産	一五九

蠟燭……………一八九

小雨ふる日……………三三五

山上の雷死……………二五一

出京……………二九三

山の悲劇……………三四三

山の湯

「早くお歸んなさいまし。」

「え、難有う。」

私はかう言つて躊躇して、「でも、僕なんか誰も待つてゐる人はないんだか

山の湯

ら……。」

「でも、東京にはまた面白いことがありますよ。」

さびしい私の生活に同情するやうな顔をして細君は言つた。私は友達夫婦の歸京を送るために揃つて宿から出懸けて來た。あとからは二臺の車が續いた。

「本當にいつ歸るんだい？」

二三間先に歩いて行つた友達は振返りながら私に訊いた。

「さア、まだわからない。」

「しかし、もう随分長くなるぢやないか。來たのが七月だから、もう三月になるね。」

「もう、さうなるね。」私の胸には徒らに過ぎ去つた月日が振返られた。三月の間、私は何をしたであらうか。持つて來た爲事の何を私はしたであらうか。私

は机の上に徒らに展ひらけられた白い原稿紙を眼の前に浮べた。

「これから少し静かにして、みつしり書かうと思ふから。」

私達の前には、やがて朝の静かな湖水の一部が見え出した。山は十月の初はもう寒かつた。早い葉は黄きいろくなつて落ちた。湖尻には湯氣が白く颯かざつて、湯の匂ひが冴えた朝の空氣に沁みるやうに思はれた。路傍みちわたりの共同浴槽きょうどうよくそうから赤い肌をした男が手拭をさけて出て來た。

「好いなア、かういふ處に始終しじうゐられ、ば——。」

「でも、東京も好いよ。」

「しかし東京に歸つて、またあくせくしなげばならないと思ふと、イヤになるよ。」かう言つた友達はちよつと笑つて、「君の東京に歸らない理由はちやんと知つてるよ。」

「そんな理由なんかありやしないよ。」

「まア、しかし、成たけ早く歸り給へ。」

車夫はいつか梶棒を下してゐた。もう少し送つて行かうと言つたけれど、もう此處で澤山だと言つて、友達は別れをつけた。細君もわかれをつけた。

「ぢや、左様なら。」

「左様なら。」

見ると、番頭も送つてゐた。細君を先に、友達は後から續いた。湖畔を縫つた路はうねくと長く續いて、色ついた脊の底い灌木だの熊笹の藪の間などを通つて行つた。二臺の車の並んで行くのが長い間此方から見えてゐた。細君の水淺黄の蝙蝠傘もさびしく見えた。

私は踵を旋した。

木賃らしい小さな宿の店先では、大きな包をかゝへた行商の男が新しい草鞋の紐を結んでゐた。ある雜貨店の店では、上さんが襦袢をかけて、せつせと勝手元を働いてゐた。大きな温泉旅舎の障子はびつしやりと閉つて、二階の欄干にかけた手拭がさびしく朝風に動いてゐた。

過ぎ去つた夏の賑かさに比べて、何といふさびしさであらう。白いリンネルの服を着けた外國人、快活に馬上に跨つた外國婦人、赤いネクタイ、紫のバラソル、藝者らしい綺麗な女と並んで歩いて行く浴衣姿の男、夜は暗い浴槽に浴客が一杯集つて、浪花節を唸つたり、流行唄を唄つたり聲色をつかつたりした。あの賑かさは何處に行つたらう。かう思ひながら私は歩いた。

一昨日の夕方、ふと二階から下りやうとすると、下から新たに着いたらしい

客が女中に案内されて上つて来た。

「ヤア、君か。」

「此處にゐるのか。」

「ヤア、奥さんと一緒かえ。」

思ひもかけない友達夫婦は、私のゐる室の奥の一間に案内されて、それから其處に今朝までゐた。友達は會社の方へ出てゐた。「二三日ひまが出来たから、たまにはと思つてつれて来たがね。矢張、噂は厄介だよ。日本の女、ことに家庭の女は、世間を知らないから一層厄介だよ。」などと言つた。細君はめづらしさうにして、いろ／＼な話をした。途中で見た瀧や名所の話などもした。廣い原を通る時のさびしさなども話した。

此頃こそ二人の生活が扇を開いたやうに遠く離れて了つて、滅多に逢ふやう

な機會はなくなつて了つたけれども、その細君が初めて友達の家の人になつた時分には、私達は三日にあけず、互に行つたり來たりしたものだ。私の妻もその細君と親しい交際をつゞけてゐた。

「おしげさんもお子さんだちもお變りはありませんか。いつも御無沙汰になつて了つて、一度上らなけりやならないと思つてゐるんですけれど……。」

「いゝえ、お互ですよ。」

妻があり子供があるのを投げ放しにして、三月も四月もかういふ山の中に来てゐるといふことは、友達夫婦に取つては、普通の家庭にあり得ないものやうに思はれた。『そんなに長く留守にしてゐらしつて、よくおしげさんが黙つてゐますね。』かうぢかには聞かないまでも、言葉の中にはいくらかさういふ語氣が雜つてきかれた。友達夫婦は私の噂を彼方此方できゝかぢつて、自分で勝

手に解釋して、種々と違つた觀察を私の上に投げてゐるらしかつた。
「でも、さうばかりは言つてゐられないよ。藝術家だつて、矢張人間のすることとは矢張しなけれりやならないからね。何うも藝術家つて言ふものは、自由すぎるよ。それは僕だつて、君の心持はわかるがね。もう少し拘束する必要があるね。君なんぞは何方かと言へば、餘り自由すぎるんだよ。」
「少しも自由なことはありやしない。今でもまだ自由を求めて悶えてゐるんだよ。」かう言つた私は途中で話をよして了つた。私はかういふ山の奥まで世間の聲が聞えて來やうとは思はなかつた。

私は歩きながら考へた。

私は私の生活を繰返して見た。自由すぎるだらうか。無拘束すぎるだらうか。

無反省すぎるだらうか。ある女からある女へと移つて行く心と體、何故それがわるいのであらうか。妻と子とから受ける幸福、社會から受ける幸福、自己の自由を拘束して、妥協したところから起つて來る幸福、それも確かに幸福には相違ない。さういふ幸福に甘んじてゐられる人間は澤山ある。しかし人間はさういふ幸福に甘んじてゐなければならぬやうに出來てゐるだらうか。つくられてゐるであらうか。

つくられてゐる人間はそれでも好い。しかし自分にはそれは出來ない。倦きるものは倦きる。棄て去るべきものは棄て去る。減ぶべきものは減ぶ。生きるべきものは生きる。自由でなければならぬ。

こんなことを考へたが、しかしそれはほんの暫しの間であつた。私はいつか私の通つて來た今までの徑路を繰返してゐた。本能の底に横つてゐる報酬の理

と言ふやうなことを考へながら歩いた。

【三】

二階は此頃はすっかり明いてゐた。何處に机を持つて行つて坐らうが差支なかつた。私は三月の間に其處にやつて來た種々な人達を頭に描いた。若い妾を伴れて來て十日間滞在して行つた貴族だといふ老紳士、折角新婚旅行に來て室がないので狭い六疊の一間に押込あられた若い夫婦、勇しい扮装をして朝早く高山に登つて行つた學生の群、ある朝早く湯殿の戸を明けて行くと、其處に黧の長い肌の色の白い女が向ふむきになつて鏡に向つてせつせとおつくりをしてゐたことなどもあつた。ある中年の女とは懇意になつて、種々東京の話などをした。それはこの奥の鑛山の幹部につとめてゐる男の跡を趁つて來たやうな女

であつた。男には東京に家もあれば女房子もあつた三日おき位に男はやつて來て泊つて行つた。女は山の中の獨居をさびしく、をりをり宿にある三味線を持つて行つてひとりで弾いた。夜など欄干の肱椅子ひざいすに身を凭もたせて聞いてゐると、何となくさびしい心がつまされて、私の頬に涙の落ちて來たことも一度や二度ではなかつた。女は一中節の小春髪結がすきで、よくそれを弾いた。むづかしい込んだ手が靜に巧にあやなされて行つた。「八景」の中では「更あけて青田にこがる、蚕、櫛かみ子こまで來て蚊帳かやの外……」といふところが殊に私の心を惹いた。

段々懇意になつて「今日は旦那さんがお出でになる日ですね」などと私は言つた。旦那の來る日はきまつて髪結かみむすがその室に呼ばれて行つた。綺麗に結つた髪をくつきりとあたりに見せて、ほつと上氣した顔で湯殿から出て來る浴衣姿は、かういふ山の中の温泉場では見られないほど艶であつた、私は小説本など

を貸してやつた。

その旦那のつとめてゐる鑛山は、そこから山を越えて二里ほど行かなければならなかつた。金の多く出る山で、四五年の中に、谷合には立派な村落が出来たとさへ言はれてゐる。そこに行くには、此處に来る前の大きな原から行く方が路が楽なのであるが、旦那はそつちを通らずに、いつも近い山越しの路を選んでやつて来た。「私にも一度行つて見ろつて見ふんですけれどもね……大變ですからねえ、輿なら行けるさうです。山の中に、此處のよりは小さいさうですけれども、湖水があつたり何かするんですつて。いゝえ、旦那つて、此處に長くゐる譯ぢやないんですとも……。来たのは去年ですよ。來年あたりは、東京に歸るんでせう。何でも山に知つてゐる人があつて、是非來て呉れつて頼まれて來てゐるんですから」などと女は私に話した。私は二里の峻しい山越しをして、

此方へ下りて來る男の戀を想像した。

さういふ男の心に私は昔の私を發見せずには居られなかつた。時にはさういふ「昔の私」が今の私の心に蘇つて來たりした。私は白い肌と濃い髪と齒のかけ合ふ音とを思つた。旦那は鬚の濃い色の黒い何方かと言へばあまり好い男ではなかつたけれど、何處か女の心を容れるに足りるやうな男らしさとやさしさとを持つてゐた。

宿の人達の事情にも私はよく熟してゐた。初めはわからなかつた娘と女中との區別もわかれば、老主人と番頭と老主婦との關係も飲み込めて來た。女中達は皆な私達と同じやうに、峻しい山路を登つたり、めづらしい瀧や湖水を見たりしてやつて來た。え、四月に上つて來て、十月の末は歸つて行くんで御座いますから、半年以上此方にゐるやうなもので御座います。「色の白い髪の濃いお

せんと云ふ女中がつましましやかに言つた。

「町には待つてゐる人があるんだらうね。」

初めはこんなことを言つてからかつて見たが、そんなことにはまだ馴れてゐないのを私はやがて発見した。おてるといふのは、赤い褌はきをかけて、白い脛すねを見せていつもせつせと働いてゐた。

おせんはいつも入毛澤山の大きな束髪そくはつに結つてゐた。老貴族の妾が高慢だと言つてはよく私の机の傍に来てこぼした「奥方のつもりか何かでゐるんですよ。奥さんツて言はないと機嫌がわるいんですよ。」などと言つた。「大變大きい髪ねさういふのが此方では流行るんですか。」かうその中年女が訊くと、「さういふわけでもないんですけれども……」かう言つて自分で髪を撫たでて見た。
ある日おせんは言つた。

「あの方はお歸りになるんですつて。」

「誰？」

「向ふの東京の方。」

「さうかえ。それは惜しいね。さう言つてゐたかえ。」

「旦那さんが明日山から来て、一緒に歸るんですつて。」

「それは惜しいね。」

二月以上も聞馴れた三味線に別れるのが私には此上なく惜しかった。それに、あちこちで邂逅かいこうしたその顔——湯殿に、廊下ろうかに、庭に、共同浴槽の前に、湖畔に、いろいろくなくで邂逅したその明るい顔にわかるのが惜しかった。

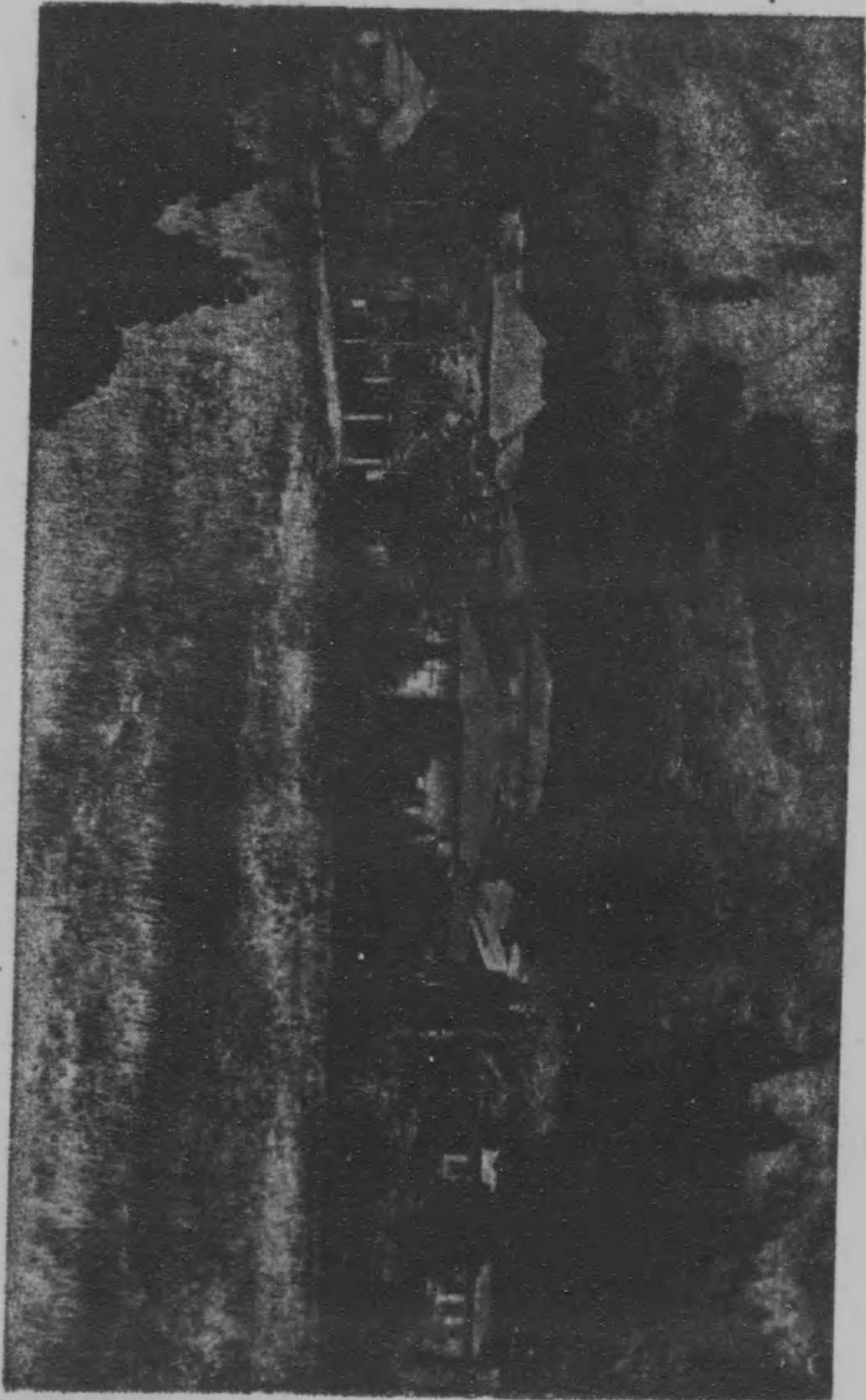
その晩それでも向ふから別れを告げに來た。住所などを教へて、「是非、歸つたら、一度遊びにお出でなさい」などと言つた。三味線の話をする、「私なん

が駄目ですよ。』とは言つたが、それでも三味線を持つて來させて、二つ三つ弾いて呉れた。

「一中節の好きな女を知つてゐたもんだから、何だか昔が思はれて爲方がない」かう私が言ふと、

「大變なところで、お惚けを聞かせられますね。」
と言つて女は笑つた。

翌日の午後、車を二臺並べて立つて行くのを私は後から見送つた。それは浴客に歸思を催させるやうなうら寒いさびしい晴れた日であつた。五六日前から、歸る人達の車は絶えず續いた。大きな旅鞆たびかばんに信玄袋に土産物をつんだ包、番頭は揉手もみてをしながら、腰を下けて、いつも湖畔のところまで送つて行つた。人達は長い間呢なじんだ人達に別を惜しむやうにして歸つて行つた。



泉全湯の蘆根箱

「また來年は早く來ますよ。」

こんなことを言つて行く人もあつた。

客の歸つて行つた宿屋の圍爐裏の傍の夜は靜かであつた。娘や女中達や老主婦などのぐるりと取巻いた上に、ランプが靜かに照してゐた。番頭は帳場に居眠りなどをしてゐた。

「大分、靜かになつたね。」

かう私はおせんに言つた。おせんは疲れたやうにほつと溜息をついた。

それからは客は歸る一方で、來ても一晩泊りの客ばかりであつた。日の光がもう秋のやうに弱く黄く當つて、大根の青い葉の上には赤い蜻蛉などが亂れて飛んだ。欄干から見わたされる湖水の一部は、染めたやうに碧く澄んで、穂を出した葎がさびしく夕暮の風に靡いた。山のかひからさし込んで來る夕日は黄

く草原の上を落ちた。

凄しい風雨で家が揺ぐやうな日には、私は二階から下の間に机を移して、雨戸を閉めて小さくなつてゐた。午後からは、樋が壊れて湯が来なくなつた。客室から母屋の方へ行く廊下は、しどろに濡れて、吹きちぎられた山の木の葉が一杯に溜つてゐた。

[III]

友達夫婦の歸つて行つた日から、私は爲事を始めた。始めは矢張何うしても出来なかつたが、午後から少しづつ筆が進んだ。勞れた筆だ、眞に勞れた筆だ。私は引摺られるやうにして一字一字書いて行つた。私は長い間の空しい努力と無益な浪費とを考へた。私は筆を措いては、野と山と湖水とを見た。

私はせめてはあの女だけは書きたいと思つた。あの女の肉體、あの柔らかな肌につままれてゐる心、あの伶俐な才ばしつた男を飽まで引つけなければやまない姿、あれを何うしても描きたいと心がけた。傷痕のまだ完全に醫えない私に取つては、それは容易な業ではなかつた。私の心はすぐそれに捉へられて行つた。

名工が刻んだ彫塑にあらはれたやうな細かい影の多い襷に逢つては、私はよく躊躇して溜息をついた。私は肱椅子に凭りかゝつて長い間湖水に泛んでゐる舟を見詰めた。

軽い足音がしたと思ふと、おせんヒコヒコの莞爾した顔がそこに現はれた。昨日頼んだ洗濯物をたゝんで持つて来て呉れたのであつた。

「難有う。」

「綺麗になりませんよ。」

「いや、澤山だ。」洗濯物をそつちの方へやつて、「寒くなつたね。」

「本當ですね。」

かう言つて、其處を去らずに、後姿を此方に見せて、湖水の方を眺めて立つてゐた。相變らず大きな束髪に結つてゐた。

「もう、歸りたいだらうね。」

「え、無心に笑つて、『もう、蘆を刈りはじめたのか知ら。』」

「今朝刈つてたよ。」

「さうですか。ぢやもう一月か一月半ですね。」

「半年扱いたかはりに、町に下りると、面白いことが澤山あるだらうね。」

「町だつて、面白いことはありません。雪が降つて、風が吹いて、唯、寒

いばかりですもの。」

「でも、此處よりは好い？」

「それはさうですけども……。」

かう言つて矢張立盡してゐる。今一二年と言はず、この女も、何處か小さい店屋か何かの細君になつて、男といふことを知るのであらう。その白い肌や體が男の肌に向つて靡いて行くのだらう。苦勞をするのだらう。そして子供を産んで年を老つて行くのだらう。そしてその生活が何んなつまらない生いき効がひのない生活でも、それに満足して暮して行くだらう。私の經驗したやうな世界、さういふ世界は夢にも知らずに、さういふ複雑した心の世界が此の世の中にあるとは知らずに、のんきに一生を送つて行つて了しまうであらう。そして死んだ墓の上に雪が積るのだらう。かう思つた私は、私の胸に横つた複雑した心理の光景に

比較して考へずには居られなかつた。私の書かうとする女主人のやうな女もゐるのに……。私の経験したやうな凄まじい秘密がこの両性の間には横つてゐるのに……。

おせんは此方をふり向いて、

「始終、書いてゐらつしやるのね。何をお書きになるの？」

「うむ——詰らないものだ。」

「小説？」

「うむ——。」

「可哀相な小説が読みたいものね。」

「小説は好きかえ。」

「好きですとも……でも、小説なんかよんでゐると、おかみさんに叱られます

からね。」

「不如歸」見たいなものが好いんだらう。」

「え」不如歸」大すぎ、可哀相さうねえ。」

誰か呼ぶ聲が下で聞えたので、おせんは急いでバタバタと駆け出して行つた……。私の眼の前には女の姿がありありと見えた。私は筆を執つた。

私の胸には、外圍の海岸で、人知れぬ幽棲を求めて、暑い日影の海の上に二人絡みついて泳いでゐる繪のやうな光景が浮んだり、蔽ひをすつかりしめ切つた馬車の窓から紙屑を捨てた白い綺麗な手が見えたりなどした。ある女は久しく逢はなかつた戀人をそのまゝ浴場の中に迎へ入れた。私は手を伸して、後に置いてある靴を引寄せて、その中から黄い紙表紙の外國語の本をさがして、そしてそのある一ところに長い間読み耽つた。

ふと気が附くと、裏の畑で、此處の老主人が尻端折に裸足といふ姿で、頻りに塵埃の山を燃してゐた。黄い煙が靜かに薄く颯つてゐた。私は二階から下りて、下駄を突かけて其方へと行つて見た。

靜な山畑だ。大根の青い葉の上に夕日が斜にさしわたつて、名も知らない鳥がキ、と鳴いて過ぎた。山際の樺や山毛櫨の葉はもう黄くなつて、梢が半ばあらはになつて見られた。

私は靜かな心持になつてゐた。町にあるその老主人の家が、息子の代になつても町で屈指の裕福な身代になつてゐるのは、皆なこの老人の働いた結果であつた。老人は維新の亂の時に、賊軍について會津の山奥に行つたが、城が圍まれる時分、三日も四日も飯を食はずに山越しに逃げて町に歸つて來た。『世の中が變るんだから、何しても、かうしてはゐられない、私もな、さう覺悟しまし

てな。それから働きましたよ。何でもやつて見ないものはない位ですからな』こんなことを言つて、老人はある夜私にその経歴話をしてくかせた。この温泉旅館も、皆なこの老人の經營したものであつた。老人は今でも四月になると、町からはるばるこの山の中にやつて來た。『年寄爲事には好い爲事ですよ。』などとも言つた。

『旨い大根がもう食へますね。』

『え、もう出來ました。』

かう言つて手を留めて、『何うも、塵埃がちき溜りましてな。』

私は老人を相手に長いこと話した。火と水の中を通つて來た老人の心とその巴渦の唯中にゐる自分の心とを比べて考へて見た。今まで机の傍で考へてゐた生活と、この老人の生活と、そこに何んな廣い間隔があるだらう。私は靜かに

歩きながら、淡い水のやうな老人の心の境を繰返した。
老人の皺だらけの顔には夕日が赤く照つた。

【四】

静かな温泉場で互に取交した手紙を読んだ二人の戀人の物語を胸に描きながら、私は女からよこした手紙を鞆の中から出してひとりで讀んだ。

これまでも私は度々その手紙を出して見た。しかしその夜のやうに落附いた静かな心持でそれに向つたことはなかつた。私は其處にも此處にも女を見た。女の明るい聰しけな眼を見た。女の綺麗な顔と姿とを見た。何も彼もその手紙の中に深く籠められてあつた。

新草の萌えるやうな思ひもあれば、あついあつい燃えるやうな心もあつた。

逢はれぬ恨み、病の後の逢瀬、ある手紙には、赤い女の口紅が黒ずんで乾きついでるた。フランスの短篇作者の作の中に、『だつて爲方がない、戀は戀だから……。他に理由はないのだから、體と體とが両方に必要になつて来るのだから、離れてゐても、その間には、見えない力と線とがあつて、それが絶えず波打ちつゝあるのだから……。』かういふ言葉があつたが、それが今更のやうに烈しく強く私の心に蘇つて來た。『別れてもよう御座んすとも……。しかしこのまゝでは別れられない。一度逢つて、静かに話して別れたい。ですから是非もう一度來て下さい』かういふ手紙を展げた時には、私は思はず溜息をついた。實際、静かに一夜話して、それで綺麗に別れることが出來たであらうか。却つてその爲めに二人の間は別れられないやうになつて行かなかつたらうか。私はそれから今までつゞいて來た月日を考へた。

「貴方のやうな薄情な人はない。勝手におしなさい。今の中に、何うかしなけりや、年を取つてから何んな眼に逢ふかわからない。足元の明るい中に何うかしなけりや、私だつて、あとになつて困りますから。」

「勝手にするさ。」

「勝手にしますとも……………」

こんな會話を私達は何遍繰返したことだらう。一本の手紙にはかう書いてある。「私がわるう御座んした。何うか、此間のことは勘忍して下さい。私はさういふ心持で言つたのではなかつたんですから。あれから、私は何んなに泣いたでせう。私達の間は、こんなことで別られる仲ですか……………」

それからそれへと讀んで行つた私は、いつか落附いた靜かな心持ではゐられなくなつてゐた。私は私の今ゐる室に女と一人で來て泊つた時のとを繰返した。

この室からは 矢張その湖水が見えてゐた。その朝は山に白い雲が靜かに繪のやうに靡いてゐた。その前の籐椅子とういすに女は身を横へて靜かにそれを見てゐるのは、まだ昨日のやうに思はれる。二階を下りて、湯殿に行く廊下、そこは女の常に歩いて行つたところだ。「おゝ、冷めたい水だ、丸で手が切れるやうですね」かう言つた水は矢張同じやうに樋とぎから流れて落ちてゐた。

私は筆を執る氣になれなかつた。私はその考から離れやうとして、二階を下りて外へ出た。客の少ない温泉場はしんとして、旅館の室の灯の影も稀れであつた。私は水の樋から落ちるところに、何處からともなく微かにさし込んで來る月の光を見て立つてゐた。水はちらく〜と細かに搖うごいた。

其處で何か物を洗つてゐたおせんは、

「お湯に入らしたの。」

「いや、散歩。」

かう言つて、私は共同浴槽の方へ行つた。浴槽には湯瀧の落ちる音がドウと聞えてゐるばかりで、誰も入つてゐるものはないらしかつた。私は引いてある長い樋に添つて、元湯の沸き出すあたりまで行つた。山の寒い夜露は草の上にしど、に置いて、微かに残つてゐる蟲の音ももう絶えんぐになつてゐた。私は山裾の奥の浴槽の處まで行つて、そこから引返して來た。

この散歩は少くとも私の心を落附かせた。不思議にも私の心は書くことに向つて熱してゐた。私はその夜はおそくまで机に向つた。

【五】

霧が一面に閉ぢこめて、一間先も見えないやうな日もあつた。私はその深い霧の中を衝いて、湖畔を辿つた。

をりをり樹が見えたり湖水の一部が見えたりした。岸の草は枯れて、黒く淀んだ水が悪魔のやうに覗いて見られた。天地は全くしんとして了つてゐる。唯、霧が白く流れて動いてゐるばかりである。

都會の賑やかな生活に比べて、何といふ靜かなさびしい自然だらう。樹は唯生長してそして枯れて行くのである。山は聳え湖はたゞへてゐるばかりである。霧の中から人の姿が現はれた。山はしこを負つてせつせと此方へ歩いて來た。「今日は。」

かう言つて挨拶して通りすぎた。

私は何とも言はれないさびしさをひしと胸に感じた。自分は唯一人である。この深い霧の中に唯一人である。私は「一人」といふことを考へながら歩いた。

何も彼も皆な過ぎ去つて了ふのである。一夜の歡樂も、美しい女の抱擁も、負ひきれないほどの名譽も何も彼も倏忽にして過ぎ去つて了ふのである。我々は口を酸くして宇宙の眞理を論じ且つ探究した。ある時には眞理の一角をつかみ得たと信じた。しかし、それは其時の状態だけで、氣の附いた時には、その眞理は皆な指の間から滑つて逃げて行つて了つてゐた。そして唯、孤獨——残るのは孤獨ばかりであつた。

自分は何んなにいろいろなものに對して誓を立てたらう、熱い心、烈しい心、さういふ中を私は長い間通つて來た。手と手とを堅く握り合はせ、心と心とを深く結びつけ、離さうとしても離すことの出來ないやうな境をも經て來た。そして今は何うだ。霧の中にかうして唯一人ゐるではないか。こんなことを思ひながら私は歩いた。霧は白く流れてゐた。

ある晴れた日、私は裏の山の方へと入つて行つた。鑛山から山越しに女に逢ひに來た男のことなどを考へてゐた。その鑛山のあるあたりまでは行かうとは思はなかつたけれど、兎に角、少し歩いて見やうと思つた。私の前には深い深い林が続いた。大きな樹が縦横に倒れてゐたりした。

私は私の心を、私の體をこの深い林の中に埋めて了ひたいと思つた。草藪は草藪に續いた。何うかすると、重なつた葉の間から洩れて、日影がばつと赤い光線をあたりに漲らせてゐるやうなところもあつた。赤い實を綴つた枝や草などもあつた。

「あゝあゝ。」

思はず私は溜息を吐いた。

をりをり私は後を振り返つて見た。それは私とかの女とを連絡してゐる一筋の

路であつた。私は廣い原、険しい山路、賑やかな町、長い汽車を想像した。一度首をひるかへせば、私の心は一目散にかの女に向つて走るべく準備をしてゐるのを發見した。私は首を振つてそして前に進んだ。

小さな木小屋が林の中にあつた。其處まで來るには、私は少くとも一時間以上を費した。私は疲れてゐた。

木小屋の前のところは、林が一ところ切開かれて、明るい日影が草藪の上に落ちてゐた。二人の樵夫は頻りに大きな木を挽いてゐた。木の屑が到るところに散亂してゐた。

「水を一杯頂戴したいもんだが。」

かう言つて入つて行つた。一人の若い方の樵夫は、手を留めて、私の方を見たが、

「そこにあるから、澤山お上んなさい。」と言つて、向ふの方を指した。そこには二つの水桶があつた。柄杓が添へてあつた。私は人生に渴したもののやうに柄杓に口を當て、思ふさま飲んだ。水は冷めたかつた。

「好い水ですね。」

私はかう言つて、「此の近所にこんな好い水があるんですか。」

「このすぐ下にあるだ。」

老いた樵夫の引く鋸の齒からは、木屑が絶えず落ちた。

少し休ませて貰はうと思つて、私は其處に腰をかけた。私は黙つて見てゐた。「温泉場のお客さんけえ？」

私は點頭いて見せた。

「もうお客は減つたんべな。」

「もう、いくらもゐない。」

「これからは寒くなるばかりだからな。」

私は訊いた。「お前さん方は何處から来るんだえ？」

「うむ——遠くだ。」

「鑛山の方からかね。」

「もつと遠くだ。」

まだ一ヶ月位は此處に起臥して、木を伐り出し出しているといふ話であつた。私はかういふ生活を私の生活に引較べて考へた。

私は草藪の奥に流れてゐる水の音をたよりに、段々下へ下りて行つて見た。

草がくれに細い綺麗な川の流れてゐるあたりまで行つて、私は長い間其處に立盡した。

湖畔を取巻いた紅葉の色彩もほんの暫くの間であつた。ある夜の山おろしに、葉はすつかり散つてかさぐくと路傍に吹ころがされた。温泉宿の二階の隙子はびつしやり閉つて、欄干にかけられた手拭が徒に白く見えた。

樋から落ちる水桶の中には、紅葉の赤い大きな枝が投込まれてあつたが、それも、段々色がわるくなつて、今では見る影もなくなつて了つた。朝など、女中は手を眞赤にして白い大根を洗つてゐた。

じつと見てゐると、心まで沁み込んで来るやうな夕日の影、サツと靜かに降つて通つて行く時雨、山から凄しく冬が押寄せて来るやうなこがらしの風——夕暮などに店先に出てゐると、紅葉見の都の客がさも疲れたやうに足を引摺つて來たりした。

私は Part の一を書き上げて、ほつと息を吐いた。自分の生活が何の程度ま

で出てゐるかは自分にもわからないけれど、兎に角これで満足しなければならぬと私は思った。私の机の前の障子には、暖かい日影がさして、蠅がブンブン飛んでゐたりした。私は刻み上げた女の姿に時々思を集めて恍惚としてゐた。ある日の午後であつた。私は湖畔に添つて瀑の方へと志した。それは湖尻の水の漲つて落ちるやうな瀧で、そこからはひろい高原が唯一目に見わたされた。私は久しく其處に出かけて行かなかつた。夏の中は、よくやつて来て、半日遊んで行つたことも度々あつたが、寒くなつてからは、ついぞ此處に來たことはなかつた。私は瀧の水の上に立つて、凄しく水沫を立て、落ちてゐる瀧を眺めた。よちよちと折れ曲つた路は、やがて私を瀧壺の方へと伴れて行つた。瀧壺の傍には、木小屋のやうな小さい瀧見茶屋があつて、大きな體格をした爺さんが、客の姿を見かけて、色の褪せた毛布を持つて來たり、茶を小さい急須に淹れて

持つて來たりした。山の中からさがして來たらしい形をした木の根を一面にそこに並べて置いた。

何うかすると、都の客が「これは面白い」などと言つて買つて行つた。爺さんは黒く屋根裏の煤けた下で、せつせと草鞋などを打つてゐた。

私はよくその爺さんに話しかけた。

「さむしくないかね。こんなところゐるて？」

「別にさむしいとも思ひやせん。もう長くなりますからな。」

「もう何年位ゐるんだえ？」

「もう二十年もゐやすナア。」

この小屋の中に二十年、それを聞いた時には、私は不思議な氣がした。爺さんには息子もあり娘もあつた。娘は鑛山の方に嫁いて行つてゐた。「娘は來う來

うと言ひますけれど、かうやつて、一人である方が楽ですから。』こんなことを爺さんは話した。總領の息子はアメリカに行つて行衛知れずになり、二番目の息子は日清戦争の時に戦死した。爺さんが一廉の獵師の身分から此處にかうした小屋をつくつて住むやうになつたのは、その息子の戦死が大いに與つて力があつたらしかつた。其時一緒に來た婆さんは四五年して死んで了つた。『今では力になるのは、原の中央に茶店を出してゐる二番目の娘ばかりでさ。貴方がた御出になる時、通つて來さしやつたらうが、あの松のあるところの茶店が、娘と婿が出してゐるんでさ。何アに、はア、碌なことも仕出來さねえがな。』

爺さんのゐる處には、棚が澤山釣てあつて、口の缺けた茶器だの茶椀だのが一杯に並べてあつた。客が水を飲みたいなどと言つと、爺さんは腰を曲けて立つてそこからコップを出して渡した。

『水はそこに出てゐますで。』

かう言つて、山裾の樹の繁つたところを指した。長く引いた竹の樋から綺麗な水がちよろ／＼桶に流れて落ちてゐた。その傍には物置らしい小屋があつた。『冬になつても此處にゐるのかね。』

『ゐますでな。』

『雪が積るだらうね。』

『それほどでもありません。風が強いで、雪はたんとは積りません。』

『寒いことは寒いだらうね。』

『戸外はかなり寒うがすが、暴れる日は、すつかり戸を閉めて、圍爐裏に棹を入れて置くで、さう凌げないこともねえ。』

夏こそそのすぐ上の路を綺麗なバラソルや、美しい丸鬘や、外國人をかきの

せた奥などが通るけれど、その時分には、すさまじい風に雪で、四邊は全く太古の自然の姿に歸つて行つて了ふのであらう、私は半氷つた瀑の下の小屋にほつねんとひとり坐つてゐる老爺の姿を思ひ浮べずには居られなかつた。

『その時分は何をしてゐんだね。』

『晴れた日には、これでも鐵砲を持つて出かけますア。兎や猿は澤山にゐるが、運が好いと猪位取れるからな。』

『猪位のもんかね。』

『あ、今ぢや猪位のもんだな。昔は、私のわかい時分には、熊でも何でももるやしたがな。今ぢや開けてもう駄目だ。』

こんなことを言つて、爺さんよく昔のことを話した。これから南の山奥にかけて、冬は獵師の極樂境であつたなどいふ話もした。

『米と釜とを持つて、十日も二十日も山の中にゐたもんだ。』昔を思ひ出すやいな顔の表情をした。

久しく私は出かけて來なかつた。爺さん、何うしてゐるだらうなどと思ひながら私は下りて行つた。瀧は綿のやうに布のやうに美しく瀧壺に亂れ落ちてゐた。

雨ざらしの縁臺の傍に行つて私は立つて瀧に對した。

爺さんの代りに、今日は四十ばかりの上さんが小屋の中から出て來て、例の色の褪せた毛布を縁臺の上に布いて、如才ない挨拶をして、角の除れた金米糖を硝子の皿に入れて持つて來た。

『もう、紅葉は駄目だね。』

『も十日遅う御座いやす。』

上さんはかう言つて、瀧壺のところにある大きな楓の木の方に眼を向けた。

「お爺さん、何うしたえ？」

餘り馴々しく私が訊いたので、上さんは不思議さうにちよつと私の顔を見たが、向ふの物置の方に顔を向けて、「爺さん、あそこへ寝てるやす。」

「何うしたのかえ？」

「はア、もう年か年だで。」

「そんなにわるいのかえ。」

「もう、今日か明日かと思つてゐるんですよ。年が年だから……八十と六ですから。」

「醫師もゐないだらうね、此處等には——」

「温泉に行けやるやすけど、もうお醫者さんなんか呼ぶでもあんめいと思ひやしてな、老病だでな。」

私は不思議な氣がせずには居られなかつた。私は二十年この小屋に住んで、世の中に何があらうが、戦争があらうが、飛行機が出来やうが、そんなことはすこしも知らずに、かうして死んで行く人間を頭に繰返した。私は深い人間の生活に觸れたやうな氣がした。何も彼も死だ。それだけは確かだ。私はかう思つて樹の間から微見える物置小屋の方を見た。私は周圍の嚴かな自然が容捨なく人間に迫つて來るのを覺えて戦慄した。

暫してから、

「お上さん、原の娘さんかね。」

「へえ。」

また私の顔を見て、「二三日前から來てるんですけど、あつちにも用があつてな。……旦那さん、温泉から來たんかね。」

私は笈のところに行つて、長い間、樋から水の落ちるのを見てゐた。夕暮はいつかあたりに迫つて來てゐた。山の峽から吹き下して來る風に、木の葉は、ばらばらと雨のやうに散つて落ちた。瀧の落ちる音はドウと物淋しくあたりに響いて聞えた。

私は愛はしいさびしい心を抱いて、もと來た路を湖畔の方へと靜かに引返して行つた。何も彼も時の間にすぎ去つて了ふのだ。歡樂も苦痛も煩悶も努力も何も彼も流れて行つて了ふのだ。そして最後には、自然！自然ばかりが残るのだ。こんなことを思ふほど、私の心は悲哀と憂愁とに閉ぢられてゐた。風はまた一しきり木の葉を吹き捲いて通つて行つた。湖水には夕の雲がさびしく赤く映つてゐた。

「六」

心の秘密から來る悶えや、あさましい人間の慾や、この世にありとも思はれない濃い楽しい歡樂や、その歡樂から生じて來る悲哀や、病の體との上にする快感や——さういふものの絶えず住來する私の周圍には、いつも靜かな自然が取巻いてゐた。朝は霜が瓦を白くした。元湯の湯氣の白く凝結して懸つてゐるのが私の室の硝子障子から明かに見えた。

私は女との二度目の争闘に筆を着けてゐた。私の周圍には、いろいろなものが取ひろけられた。外國の小説もあれば、自分の書いたその時分の日記もある。束にした手紙もある。絶えず押寄せて來る幻影を私は日に何遍打消さなければならぬか知れなかつた。落附いた心を維持するために私は全力を擧げた。私

は苦痛と歡樂との複雑に雜り合つた心持を繪を見るやうな心持で見ること骨を折つた。

麓までは來ても、もう此處まで上つて來るやうな客はなかつた。あてにした日曜日にも、温泉場すべてで三組客があつたばかりだといふことであつた。女中達は町に下りて行く日の段々近くなつて行くのを喜んだ。「え、もう、ぢき下りて行くんですツて。向ふの家では、もう下りる仕度に取りかかりましたから」などとおせんは來て話した。

家々から出た人足が湖水の縁の芦を刈つてゐるさまも絶えず私の室から見えてゐた。頬かぶりをしたり、菅笠をかぶつたりしてせつせと長い芦を刈つた。中には赤い襷をかけた女なども雜つてゐた。

「もう、家の人足も出てゐますよ。」

欄干の處に立つて、おせんは其方を見ながら私に言つた。

「駄目ですよ、もう一月お残りになるなんて、それは駄目ですよ。何處の宅だツて、明けて行くものなんかありやしませんもの。それに、世話をして呉れる人はありませんからね。あすこの大湯の傍に二人番人が残るばかりなんですから。」

「でも、今月一杯は歸れなくなるやうなことはないだらう。」

『それは大丈夫でせうけども……駄目ですよ、私達と一緒に下がんなさいよ。』こんなことを言つて、快活に笑つておせんは下に下りて行つた。

凄しい冬はもうすぐ眼の前に迫つて來てゐた。日の光は薄くなり、寒氣は烈しくなり、風は強く山の巔を渡つた。裏の畑の大根はもうすつかり取られて、繩で結んで軒に下けられた。朝行つて見ると元湯から引いてある湯の長い樋の

外部は全く氷で閉ざされてゐた。内湯はもうぬるくなつたので、私は大湯の方へといつも手拭を下けて出かけた。

「寒くなりましたな、今年ももうお了ひですな。」

近所の温泉宿の人達が湯の中でこんなことを話し合つた。今年の客の多かつたことなどを話してゐた。馬車屋の亭主は、もう明日下りるといふことであつた。ある夜は、月が氷のやうに冴えてゐた。家に歸りつくまでに、手拭はいつも棒のやうになつた。

私は四ヶ月の山の生活を繰返して考へた。私はまた都會の巴渦ウツマキの中なかに出て行かなければならない身であつた。愛慾のきづなの中に、煩悶しょうもんと嫉妬しつとと虚飾きよしやくとの生活の中に――。私は私の仕事を半ばにして山から出て行かねばならない身を思つて黯然とした。

しかし、人々の歸つて了つた後を雪に閉ぢこめられて了ふにも堪へなかつた。老主人は來て言つた。「残るものと言つて、ほんに、番人ばかりで御座いますから。……また來年は四月のお釋迦さま時分までには上つてをりますから、何うか、來年も早くお出で下さいませやうに。」

女達は楽しさうにして、效々かひくしく働いてゐた。終日長く大根を桶につけてゐるなどが此方から見えた。二階はもうすつかり戸を閉めて、店に近い室の方に私は机や行李を移した。踏むにつれて、庭の霜柱はさくさくと崩れた。

ある朝、私は山に既に雪が來たのを見た。

『昨夜、雪が降つたね。』

『寒いわけですね。』

おせんはかう言つて、山の雪を眩し^まさうして見た。町に歸る日の近いことを思ふと、その寒い山の雪も女達には樂みの一つであるやうに見えた。

『去年より今年は早い。』

賑かな暖かい家庭のある町、戀人や父母の待つてゐる町、誰もその町に向つて心が波打ちつゝあるやうに私には思はれた。『これから町に歸つて半年炬燵にでも當つて、孫達とでも遊んで暮りますよ。』老いた上さんは笑ひながらこんなことを言つた。

下りて行つた日は、風が強かつたが、天氣は好かつた。刈つた苧で包んだ家はもう其處にも見えてゐた。同じ日に下りて行く家も一二軒はあつた。

駄馬が三頭も四頭もやつて來た。番頭や女中達は、持つて行く家具やら、寢道具やらを手傳つて馬に乗せた。馬の嘶きはをりをり高く朝の空氣に響いて聞

えた。老主人に上さんに番頭。まだ残つてゐる家の前を通るたびに『お先きに行つてやす。早う歸つてお出でない。』と言つて、丁寧に挨拶して通り過ぎた。

私の旅靴と行李とは、三番目の馬の背の隅に小さくなつて積まれてゐた。その中には私の半生の經驗と苦悶と歡樂とを描いた未完の原稿が入つてゐた。私は四ヶ月の山住ひをまた繰返して考へた。

肌にし透るやうな寒さが、私達一行の周圍にあつた。人々の吐く息は白く凝結した。湖畔を通る時、振返つて見ると、湖尻に湧き出してゐる湯氣が徒に白く颯つて、蘆ですつかり包まれた温泉場はしんとしてゐた。

女達は尻を端折つて、草履をはいて、元氣よく馬のあとについて歩いた。番頭にからははれて樂しげに笑つたりした。おせんは先に歩いて行く私に追ひ附いて、『足が早いこと……中々一緒には歩けませんね。』など、言つた。私達は話

しながら歩いた。

『來年もまた來るかえ？』

『來ますとも。』

『來年來て見ると、もうお嫁に行つてゐて、おせんちゃんは來てゐないなんて言ふんだらう。』

『そんなことはありません。』

『何うだかわからない。もう待つてゐる人が町にはゐるんだらうから。』

『母さんばかりですよ、待つてゐるのは。』

『何うだか。』

『本當ですとも、ねえ、お照さん。』振返つて見たが、お照は遠く離れて番頭と並んで歩いてゐた。

振返ると、山の巔には雪が白く寒く朝日にかゝやいてゐた。湖畔こまつたの路を通る時には、風が凄しく吹いて來て、地上の落葉をガサガサと捲き起した。私達一行は段々瀧近く歩いて行つた。原の方へ出て行く路からは、瀑見茶屋の小屋がさびしく葉の落ちた林の中に見えてゐた。

湖 上

『おい、定公さだこう、また今日飛び込んだって言ふぢやねえか』

土方の一人は、向ふから歩いて来る仲間の男に言つた。湖水は美しく朝日に
かゞやいてゐた。土方達の取巻いた焼火たきひは威勢よく燃るてゐた。

『女か、男かえ？』

『若い女だとよ。』

『よく生命の惜しくねえ奴ばかりあるな。……これで今月になつてから、もう五人目ぢやねえか。』

『さうよ……初めが男で、それから若い奴等が心中しやがつて、此間はまた婆が飛び込んだつて言ふぢやねえか。』

『あの婆の飛び込んだのは狂言だつたつて言ふぜ——』肥つた五十位の印半纏しるしはんてんを着た男は笑ひながら、

『誰かとめて呉れるだんべ、呉れるだんべつて あちこちうろくして居たんだが、誰も生憎とめる奴がなかつたんだつて言ふことだぜ……』

『今朝のは、何處にとまつてゐたんだえ？』

『米屋にゐたんだとよ。三日ほど泊つてゐたんだとよ……。始め、男の伴侶があつて、一緒にやつて来て、その翌日男が歸つて行つたんだつて……。別に變

つたことも無いつて言ふんだ。昨日もいろ／＼女中を相手に世間話なんかしてゐたつて言ふことだよ。だから、店でも別に怪しみもしないでゐたんだとよ。……それが、何うしたもんだか、今朝ふいと出かけて行つて、そして飛込んで了つた……』

『二十二三の綺麗な女だつてな。』

『俺ア、よく知らねえけど、……米屋の女中がそんなことを言つてゐたつけ。』定といふ男は焼火の方に體を割り込ませるやうにして、『べら棒に寒いな……今朝は！ これからはもう二兩ぢやヤリ切れねえ。』

『さうだな。夏なら好いがな。』

額に大きな瘤のあるかなり年を取つた土方が水漬みづはなをすゝりながら言つた。

『でも、あれヤ、あんまり好い氣持はしねえよなア、定公。あそこから引上げ

て、あの五郎平茶屋から長い阪をうんさく登つて来て、穴まで堀つていけてやつて、一人二兩ぢや好い商賣ぢやねえな。……』

『あたりめいの爲事なら好いけど、あんまり好い心持はしねいからな。』

と他の一人が合せた。

谷底にある茶屋から、崖を傳つたり、崖に添つて流れ落ちる瀧津瀬を渡つたりして、霧雨のやうにしぶいて来る瀑の飛沫の中を、岩角につかまつて二三間ほど辿つて行くと、底の知れない瀑壺が恐ろしいあぎどを碧く凄しく開いてゐて、その一隅に、犠牲になつた人達の死骸が漂つて横つてゐた。女の黒い髪が長く水に漂つてゐたりした。

『不思議に、あの角のところに浮いて来るなア。あそこは、いくらか瀬になつてゐると見えるな。』

肥つた男はこんなことを言つた。

『でも、あそこに浮いて来た奴は、まだ仕末が好いんだ。何うかすると、向ふ岸のところに浮き出してゐるやつがある。あいつは、世話がやけるぜ。長い竿で引寄せやうとしても中々言ふことをきかねえからな……あゝいふのは屹度後生がわりいんだな。』かう言つて定公は考へて、『いつか、女の死骸をあける時は骨が折れたツてねい。さうだ、お前も知つてゐるな。』と向ふにゐる仲間の一人の方を見て、『いくらやつても此方へやつて来ねえ。仕方がねいから、竿で、ぐる／＼長い髪を巻いて、そして三人がかりて此方へ引張り寄せたつけな。あれア……寒い日だつたな』

『しかし、好い女だツた。』

『身持だツたツて言ふぢやねえか』

『そんな話だ——』

『でも、大抵まだ綺麗になつてゐる。四十日位経つてツからでなくつては淨んで来ねいんだが、綺麗なもんだぜ……大抵、目をばつちり明いてゐるなア。』

『イヤな商賣だ。二兩ぢや已はイヤだ。』

まだ此土地に来て久しく経たない若い土方の一人は言つた。

其處へ親方らしい男が上から下りて来て、『もう、そろ／＼始めべいよ。今日は向ふ岸に何うしても持つて行きていから。』

で、一人二人と段々昨日から仕事してゐる丘の上の方へと行つた。そこには石段があつて、その向ふに華表か見えてゐた。一昨日昨日と二日かゝつて、漸く引張り出した大きなものが工事のまゝになつて其處に横つてゐた。それはちよつと見ては何だか得體のわからないやうなものであつた。角のやうなものが

見えたり、頭の尖のやうなものが見えたりした。大きな目の突出したやうなところもあつた。

それは大きな木像であつた。この山で名高い古いもので、二千年近くも大きな堂の中に立つてゐた。『立木の観音さまの靈驗は大したものだ。』かう昔からはれてゐた。それが七八年前の山のつなみで、堂と一緒に倒れて深く地中に埋まつて了つた。その後、それを掘り返す爲めの工事が度々行はれたが、今日までその結果はいつも失敗に終つた。『世は末になつた。観音様も地の中に埋まつて了ふやうになつてはもうお終ひだ……』土地の人達は誰云ふとなくこんなことを言つた。その前後から瀑に身を投げるものゝ多くなつたのも、何かそれに關係があるやうに言はれた。『昔はあらたかなお山だつた。女なぞ登つては來られなかつたぢや。それが何うだ。あの清淨な瀑から男や女が身をなけて死ぬと

いふやうなけがららしい世になつたのぢや。観音さまのお怒りになるのも無理はない』などと涙をこぼして嘆く老人などもあつた。そればかりではなかつた。古い観音の像の亡びるといふことは、一山の名譽にも關係した。で、二年も三年もかゝつて、金も澤山につかつて、漸く土中から掘出したのは、つい一年ほど前のことであつた。しかし、木像はもう元のまゝではなかつた。體はすっかり破壊しつくされてゐた。唯首から上がやゝ完全してゐるので、湖水の向ふ岸の靈地に、新たに堂を立て、そこにこれを勸請しやうといふことになつた。で、その木像の首は五六日前まで近所のある堂の二十疊敷の真中に置かれてあつた。『大きなもんです。元、堂の中に立つてゐらつしやる時は、こんなに大きいとは思ひませんでした。首だけで、十疊敷位はありますね。』わざわざ見に行つた人達がかう言つて噂をした。

『えんや、えんや！えんや！』

さういふ聲が終日静かな湖水にひびきわたつて聞えた。土方のキリンを巻いたり、臺木を動かしたりするのが遊覽者の通る湖畔の路から明かに見えてゐた。『えんや！えんや！』その聲に連れて、大きな木像の首は段々下へ下へと動いて來た。

『大したもんだな、これで中々大きいもんだな。』

土方は手を留めてそれを見てゐたりした。昨日は首の眼のところは夕日が當つて、そして段々暗くなつて行つた。『このお山を開いた上人さまが手つからお刻みになつたつて言ふんだが、大したもんだ。もう二千年から經つんだ。昔からあらたかな観音さまで、宅の婆さんなんかそりや信仰したもんだ……これが向ふにお住ひになるやうになれば、瀑から身を投げるもんもなくなるべい！』土方

の親方は、辨當を食ひながら、仲間にこんな話をして聞かせた。

『本當に不思議よ、なア、この観音さまが倒れてから、身投が多くなつたんだからなア。』

一人が言ふと、『それから、町には碌なことはない。』と他の者が合せた。

『その代り、この観音さまが、向ふにお出になると、投身がなくなるから、二兩取れなくなるぞ！』

こんなことを言つて親方は土方にからかつたりした。キリンの一卷毎に、木像の首は次第に下へ下へと下りて行つた。『えんや！えんや！』といふ聲が長く續いた。

『これは一體何ですか？』

木像の首が湖畔の路に幅をして置いてあると、そこを通つて行く遊覽の紳士

は、かう言つて傍に寄つて来て見た。

『はア、さうですか、これが観音さまの首ですか？一寸、さうは見えませんか。』

は、ア、これが眼、これが鼻、これが口ですな……』こんなことを言つて、吃驚したやうに長い間其處に立つてゐた。時には團隊で來た婆さん達が、

『観音さまのお頭だつとよ。』か言うつてぐるりと其の周圍を取巻いてゐることなどもあつた。中には、珠數を出してそして拜んでゐるものなどもあつた。『立木の観音さまって、己のお母なんかよく言つてた観音さまだ。この間、孫が日光見物に來てな、そんな観音さまねえやつて言ふから、そんなことはねえ筈だつて言つたけが、……は、ア、さうかな、長い間、土の中に埋まつてあらつしやつたのかな……物體ねえこんだ。』一人の白髮の婆さんは、かう言つて、隨喜の涙を流してゐた。

土方達の一生懸命に働いてゐる傍をいろいろな人達が通つて行つた。湯元の方へ行く軽装した學生もあれば、董色の袴をはいた十二三人づれの女學生などもゐた。『もう少しまкруらないと、それ腰巻か引づるぞ!』などと云つて土方は笑ひ噓した。

晴れた日であつた。碧の濃い湖水は山の影を靜かにその上に漂はせてゐた。眞白なスワンが一羽、旅館の雁木のところから、ギャア／＼鳴いて此方へと遣つて來るのが丸で繪のやうに見えてゐた。上に聳えた高い山には、白い雲がかかて、そしてすぐ晴れて行つた。山の半腹まで色付いた紅葉は、鏡に映つたやうにはつきりと湖水の面を輝かした。

三角の帆が湖面を通つて行つたりした。

木蔭に腰をかけて、土方達が辨當を使ふ時分には、木像の首は、もう餘程湖

畔に近いところまで行つてゐた。『さアもう一息だ!』かう言つて親方は土方を勵した。

紫の僧衣を着た年を取つた僧が、親方と何か話してゐるのが明るい湖畔に長い間見えてゐたが、暫くすると、向ふに急いで歩いて行く親方の姿が見えた。

『船の準備が早く出來ねえぢや駄目だぞ!』などゝいふ聲が聞えた。

『えんやら! えんやら!』やがてさういふ聲がまた一しきり聞えた。『それ、定公、そつちを早く持つて來い。』などゝ怒鳴つた。『野呂定、仕方がねえ野郎だ。』もう一人の土方はかう言つて笑つた。

『こいつは、女なら、死骸でも好いんだつて言ひやがら!』

皆な大きな聲で笑つた。『えんやら、えんやら、それもう少し! もう一息!』かう言ふ聲と共に木像は湖水の波打際近くまで動いて行つた。

船の支度は、親方が出かけて行くと、まもなく出来た。傳馬を二艘並べて、丸太を十本ほど渡して、臺木を滑らして、そしてその中に木像を入れる準備に人々はやがて取りかゝつた。路から船の高さに上げる努力がまた暫く續いた。丸太はそれからそれへと先へ持つて行かれた。キリンを巻く懸聲は湖水に響いて聞えた。『もう占めた！』親方がかう言ふと、大きい木像の首はずるずると滑つて船の中に入つて行つた。

二艘の傳馬に幅をして載せられた木像の首は、午後の日影を受けて、明るい湖水を背景にしてはつきりと浮き出すやうに見えてゐた。湖水と陸との聯絡が絶たれると、『いゝか乗るぞ！』かう言つて土方はぞろぞろと船に飛び乗つた。三挺の櫓の音が湖水の上に響き出した。

ある訪問

「一」

人形 / 聖書
木村 菜菜子
七五

T町の小さな停車場で私は下りた。

もう日は暮れてゐるので、停車場が町の何の邊に出来たのか、ちよつと解らなかつたが、其處を出て少し行くと、段々その位置が飲み込めて來た。何でも

ある訪問

町の北の裏に當つてゐるらしい。それに、この汽車は小さな軌道で、單にT町との連絡を取つてゐるにとゞまつてゐるので、停車場も小さく、その前の人家も淋しく、そこらに見える灯なども少なかつた。

私は靜かに歩いた。

私の胸には種々な感じが集つて來た。そして私はその種々な記憶から起る感じを靜かに獨り樂しむやうな氣分で歩いてゐた。何んなに長い間、私はこの町に來ることを望んだであらう。また何んなにその昔の記憶を此處に來て繰返すことを望んだであらう。しかし種々な世間のことが私の此處に來るのを碍けた。忙しい生活、片時も靜かに落着いて考へてゐることの出來ない生活、それに、今でこそこの小さな軌道が出來たが、去年までは、此處に來るのに、六七里も山の中に入つて來なければならぬので、ちよつとやつて來るといふ譯には行

かなかつた。

人生の急湍激流にも、時には靜かに深潭をたゞえてゐるやうな時があるものだが、私の今の心は丁度それだ。烈しい凄じい流れからちよつと落ちて、淀んで靜かに潭を湛えてゐる。更に再び流れ出せば、或は奔湍となるかも知れない。或は直下百丈の大瀑布となるかも知れない。しかし今は、少くとも今は靜かに穩かに、流るゝ瀬もちよつとわからない位に淀んで湛えてゐる。この心が私をこの町へ伴れて來た。

地上にはまだ雪がなかつたけれど、四面をめぐる山々の頂は既に白く、夕日の餘照の照り残つたあたりは、赤く暗く指さゝれて見えた。寒い夕暮の風は私の耳も切るゝばかりに吹いた。

停車場の位置が段々飲み込めて來ると同時に、町の位置も次第にわかつて來

た。あそこにあの寺がある。あの黒い森は確かにあの寺である。あそこに社がある。あの向ふが町の通りだ。町は西から東へと一筋道を成してゐるのだ。かう思ふと、城址じやうしなどの位置もそれと指さされた。

十五分後には、私はそのなつかしいT町の四辻の處へと行つてゐた。郵便局、それは依然として昔のまゝである。その向ふにある警察署、それもそのまゝである。私は依然としてさびしい庇の長く出てる灯の小さい田舎の町を見た。

私は頭髮を長くして、キャラコキャラコの黒紋附を着て其處を歩いてゐる私を見るやうな氣がした。歌を詠む私、拙い小説を書く私、センチメンタルな私、暗いさびしい悲しい心で満された私、それをも明かに其處に見ることが出来た。二十五年の歳月が既に其間に流れてゐるとは何うしても思はれなかつた。「人間といふものは不思議なもんだな」かう私は思はずにはゐられなかつた。

今宵一夜を靜かに楽しい追憶おぼひに過さうとする旅館は、その向ふの方にあるのであるが、その前に、義兄が此處の郡長をして住んでゐる家を見たいと思つて、私は一二町ほど町を逆に引返して行つた。

松が門にかぶさつてゐる家だから、すぐわかる筈だと思つたが、行つても行つても、その松がない。終には町が段々場末になつて行つて了ふ。で、引返して、今度は注意して一軒々々見て歩いた。とはつきりそれともわからないが、たしかそれらしい家の構があるので、近寄つて覗いて見た。玄關のつくりは違つてゐるが、何うもそれらしいと思ひながら見てゐると、ふと灯に明るい窓がそれとなく眼に附いた。確かにそれだ。此家だ。この窓は昔のまゝだ。その窓の奥に六疊が二間ある。その一間に炬燵こたつが切つてあつて、そこで私は田舎新聞の小説の續き物を毎日一回づゝ書いた。と、頬の豊かな姪が其處に茶や菓子な

どを持つて来て呉れた。姪は私の姉の長女であつた。私の姉はその時既に死んで、義兄には後妻が来てゐたが、義兄はそれでも私達兄弟のことをよく心配して呉れた。義理ある姉は死んで了つたが、不思議にもその顔が其時ありありと私の眼に映つて見えた。義理ある姉は其後狂氣になつて死んだ。不仕合せな姉と、すぐにその後から、漢詩や和歌を作ること唯一の老後の樂みにした七十先の義兄の父親の顔やら態度やら言葉やらが浮んで来た、どろ海丹が好きで、毎朝、飯にそれをかけて食つた。『おぢいさんの眞似は出来ない』かう言つて、義理ある姉が顔を蹙めるのを、わざと見せつけるやうにして、箸で海丹をその老父が挟んでゐるさまが歴々と見た。十日ほどの滞在中、その老父は『銑さん、銑さん』と言つて私を町の話せる人達の許へつれて行つた。寺にもつれて行けば、豪商の家にもつれて行つた。老父は維新の變遷に際會して、つぶさに艱難

を嘗めたので、何處かしつかりしたところがあつて、物に拘泥しなくつて、好い老人であつた。『田舎には、話せるものがないので、それが一番困る』こんなことを言つては、よく私に歌や詩を見せた。

障子を明けて人が出て来る氣勢がしたので、私は急いでそこを離れた。

【III】

町で一番好いのださうだが、しかもそれは佗しい古い旅舎であつた。私の通された室は、二階の八疊で、床には拙い山水の幅物がかゝてゐて、俳畫めいた細長い額が長押に見られた。しかし幸ひに、炬燵はあつた。私は逸早くそれに當つて、冷えた體を煖めた。

あの歌を詠む娘のゐた豪商の家は、このあたりだと思つたが、續いてその娘

——背の高い姿のすらりとした娘のことが思ひ出された。今るれば、もう四十五六のおばアさんである。それに、その時、其家そのうちで生れたばかりの女の兒に祝ひの歌を私が詠んで、それを短冊に書いたが、その女の兒はもう二十七八になつてゐる筈である。その時出して呉れた大きな皿の鮓、それを娘は白い綺麗な手で、小皿にわけて取つて呉れた……。

「何んて言つたつけな……」

さう思つたが、容易に思ひ出せない。玉子、さうぢやない。静子、さうでもない。何と言つたつけな、姓は正木と言つたが、名は、名は……。

風呂から上つて来ようとして、階段のところ、不圖それを思ひ出した。「さう、さう淑子……正木淑子」かう私は獨話して微笑した。その淑子は一二度私に手紙をよこした。

晩酌はんしやくの膳に侍した女は、此處あたりよく見る酌婦しやくぶに近いものであつた。頬の赤い、肥つた、手をて駢びだらけにした……。

私はそれとなく訊いて見たが、土地のものでないので——それに、つい二月初めに來たばかりだと言ふので、少しも土地のことを知つてゐなかつた。「そんな古いことなんか知らない。それもな、この土地のものなら知つてゐたらうけれども……」

「誰かゐるのかえ？」

「何うだか……聞いて見ませう」

かう言つてその女は下りて行つた。

續いてやつて來た三十二三の女は、それでも町の生れだけに、いろ／＼なことを知つてゐた。私はその正木といふ豪商が七八年前に没落した話や、多分私

が祝ひの歌を書いてやつた女の見であらうと思はれる娘が、ある男にはまつて、騙だまされて、死ぬ生るの騒ぎをやつた話や、その主人が懊惱あうなふはんもん煩悶して死んで行つた話などをその女の口から聞くことが出来た。しかし淑子の行方に就いては、女は何事をも知つてゐなかつた。「さういふ姉さんがゐたさうですけれども、何うしましたか。お上さんにでも御訊きになればわかるかも知れません」かうその女は言つた。

従つて私を二十五年後に、こゝにやつて來させた人達の消息などは無論この女などにはわからなかつた。それに、その人達はこのT町から一里ほど隔つたところに住んでゐる筈であるから……。

私は止むなく主婦、主人までを呼ばなければならなかつた。

淑子のことは主婦は知つてゐた。「何でもお医者様か何かにお嫁づきになつ

て、今は有福にして、たしか和歌山とか大阪とかに行つてゐらつしやるさうです」かう主婦は話した。しかし、その主婦さへも、私の訊かうとする一里離れた人達のことは知つてゐなかつた。

やがて主人がやつて來た。頑然ごんぜんたる老翁である。

「あ、さうですが。元の郡長のIさんの御親類ですか。」かう私と主人との間の話は始つた。

「随分古い話ですな。」

「もう二十五年になるからね。」

「さうでせうとも……私がまだ四十代の時分でした。Iさんは好い方でした。まだお丈夫ですか。」

「丈夫には丈夫ですが、年は取りました。」

その時分の話がいろ／＼と出た。旅舎の主人は今更らしくIが郡長としての成績の好かつたことなどを話した。馬市が城址に立つやうになつたのも義兄の功績の一つだなどとも言つた。

私は訊いた。

「YにT神社と言ふ國幣中社がありますな？」

「えゝ……」

「あそこは、養子をした筈だが、何ういふ人が來ましたか、御存じはありませんか。」

「あそこも縁が遠う御座んしてな。娘さん大分遅くまで獨りでゐましたが、始めに來た養子は、娘さんの二十六七の時で、これがわるくつて、さんざこの町の女に騙されたり何かして、散々金をつかつた揚句、とう／＼不縁になりまし

てな。男の兒が一人あるので、何うかして元に戻したいつて、中に入る人などもありましたけれど……宮司さんがきかないので、そのままになつて了ひました。今のは、たしか、それから四五年して貰つたんですが、何んでも特務曹長あがりか何かださうです。」

「前の養子は、この町のもんですか。」

「なアに、水戸の方のものですがな。あそこは家柄が好いとかで、難しいもんですから……」主人はちよつと考へて、「たしか、水戸の藩士で、お袋さまが水戸から來たで、そつちの方の縁引きか何かになつてゐる人だつていふ話でした。」

「宮司はまだ丈夫ですか。」

「いや、もう、とうに……もう十年位になりませう。」

「お袋さんは？」

「お袋さまも二三年前に亡くなりました。」

「それぢや、もうすっかり養子の時代になりましたね。」

「え、もう……、今はいざごさはありません。それに、今の養子は、學問はありませんが、人物は極く平ひらですから……。」

「あとの養子にも、子供がありますか。」

「二人か三人ある筈です。」

その話——私をこの山の中の町まで引寄せたその話はこれで盡きた。私は別に私の方の話を打明けて話さなかつた。をりをり主人の口を上つたさういふ方面の質問を私は常に避けるやうにした。私はそれからそれへと話を轉じた。正木家の没落の話、淑子の話などがくり返された。私が祝ひの歌を詠んやつた女の見は、今東京に行つて、幸福に暮してるといふことであつた。

「それでも、汽車が出来ましたで、これからはちよつとは町もよくなつて行くでせう。今まではほんとうに仕方がなかつたんですから……。いけなくなる一方でしたから……。」こんなことを主人は話した。

靜かに酔つて寝た私は、あくる朝、自分を裏の田圃たんぼのひろく打渡して見える二階の一間に發見した。昨夜、やつて來た時の感じとは夥しく違つて、一面に深い朝霜の置き渡した上に、連山の白雪が燦爛まはろと眩まはろいばかりに朝日に光つて、Y嶽と思はれる山がくつきりと鮮かに指された。二階の下には、さびしく氷つた落葉の池があつて、その庭の向ふに、穀物を入れて置くらしい白壁の庫が見え、それに隣つて小さな小屋の中がすつかり見えた。城址は今公園になつてゐるとかで、その右の方にひろく遠く打渡されて見えてゐた。私は立つて眺め盡した。

【三】

朝飯をすまして、私は出かけた。

Yへと志した私の車は、逸早く大通りを抜けて、I阪といふ石ころの多いがタガタする路を下へと下りて行つた。感慨が無量であつた。

二十五年前、私は義兄に伴れられたり、老父に伴れられたりして、二三度其處を通つて行つたのであつた。何の爲に？ その國幣中社、景行天皇時分からある、乃至は道興准后か一夜とまつて歌を詠んだ歴史のある、由緒の深い國幣中社の養子の候補者たるために……。

家道の振はなかつた私の家のことを心配して、義兄は私をその養子にしようとしたのであつた。弟が二人遊んでゐては、長兄は大變だ。かう義兄は思つた

のであつた。義兄はその宮司と懇意にしてゐた。

旅費を義兄が出して呉れて、それで、私は十日ほどの日数を、二十五年前に、このT町に送つたのであつた。でなければ、一生こんなところには來るやなうことがなかつたからと思はれる山の中の町に……。

歌も詠み、國語の本にもいくらか通じた私は、田舎の國幣社の婿養子には、或は適當に思はれたかも知れなかつた。それに、貧しい生活に懊惱してゐた私は、さうした新らしい生活に入るのも、面白いと思ひ、又空想澤山な青年の習ひとして、さういふ田舎に靜かに落着いて、そして好きな藝術でもやる方が結局自分のためには好いと思つた。私の若い心は躍つた。

一生の上から考へては、小さな小さなさうした話も、其頃には、艱難の多いその頃には、自分の運が開けて來たものか何ぞのやうに私には思へた。私は美

しい娘であつたなら、自分は藝術を捨て、一生田舎に埋れて了つても遺憾がないとさへ思つた。

義兄は無論その娘を見たことがあつたのであるけれども——その面影らしい片鱗へんりんは、その話の中にチラチラ雜つて出て来るのであるけれども、萬一を慮つて、『自分はまだその娘を見たことはないが、何んでも別品さんださうだ』など、あやふやなこと言つた。で、さうした空想を持つた青年は、義兄や老父や官司や官司の妻や、さういふ人達の前に露骨にある物として取扱はれた。毛色が好いかわるいか、品物が上等か下等か、さういふ冷かな批判ひはんの眼で觀察された。そして最後に、その冷い態度に反感を持つべく私は餘儀なくされた。

しかし私は今でもはつきりとその時の光景——官司の大きな邸に連れられて行つたさまを思ひ浮べることが出来た。初めは私は西風の吹く寒い日に老父と

偕に行つた。老父は大きなにしんなどを手土産に持つて行つた。私は私で、母親が苦心して直して呉れた、確か兄の袖ついでの重ね着にケンチウの黒紋附の羽織を着て行つた。其時は官司の妻が出て應對した。官司は留守だつた。酒は出なかつたけれど、何でもちよつとしたもので午飯を御馳走になつて歸つて來た。その次には義兄と行つた。その時は丁度官司もゐて、私は即席に道興准后の歌に唱和するやうな歌をよませられた。官司は古文書だの寶物だのを一杯に座敷に並べて私達に見せた。

私は襖の蔭に娘の紅い裳裾を見たやうな氣がした。笑ふ聲などもした。私は顔を赧かくした。しかし私は遂にその娘に引合はされなかつた。十日ほど滞在して、やがて私は歸京した。

で、その話はそのまゝになつた。しかしYの國幣中社T神社は、長い間私の

記憶に絡みついて残つてゐた。中でもその襖の陰に見たやうに思つた紅い裳裾もすそと笑聲とがいつまでもいつまでも残つた。そのため、T町もY村も他郷とは思はれないやうな深いある印象を私の一生に刻みつけたのであつた。

私は車の上で種々なことに思ひ耽つた。その時逢はなかつた娘に、二十五年を経過した今日逢ふことが出来たら面白いなどと思つて私は微笑した。勿論、私はその時の話はしないつもりである。名乗らぬ積である。單に他郷の一参詣者として訪れて見る積である。それに、向ふでも、もうそんなことは覚えてもゐないに相違ない。娘は私を尠くとも一度は見たに違ひないが、それを今日まで覚えてゐると思はれない。だから、逢つたところで、その知る虞のないことはたしかである。兎に角面白い訪問だと思つて、私は又微笑した。

もし、あの時、縁があつて、其處に私が養子になつて行つてゐたなら、或は

今の私の藝術は丸でこの世に生れて來なかつたかも知れない。かう思ふと、一種の淡い誇らしいものが胸に浮んで來て、續いて、幸福が幸福でなく不幸が不幸でないといふ感じが、更に新しい根據を私の心に齎らして來た。人生の千波萬波が、今の私の淀んだ靜潭せんとんにはつきりと映つて見えるやうな氣がした。

眞直に南に向つて駛はつて行く街道は、更に昔と變らなかつた。荷車が通る。頗かぶりの農夫が通る。紳士を載せた車が通る、街道に添つた農家の中には、軒が傾き疵ひびが曲り壁が落ちてゐるのはあるけれど、しかも大抵は昔のまゝで、一軒の新しい家すらあたりには見出されなかつた。街道の西には、京都の嵐山に似た低い山脈が障壁のやうに歇つて、その下を綺麗な谷川せうくが淙々と音を立てゝ流れた。

少し行くと、Hといふ村があつた。其處には、その頃、大きな豪家の庭があ

つて、その庭が谷川と前の山とを背景にして、紅葉が美しいと言ふので、土地でも名所の一つになつてゐた。漢詩の好きな老父は、Y村に行く往きに返りに、そこに立寄つて、詩吟の冥想に耽つた。寺山の紅葉といふ題は、父老がT十二勝の中を選んだ一勝であつた。

私もそれを題にして歌をよませられた。

車が其處に來たので、ふと注意して見た私は、すっかりあたりが變つてゐるのを發見した。豪農の邸宅はいつか鐵工場か何かに變つてゐて、細い煙突からは煙が立つて、エンジンが凄じく動いてゐる。立派な石があつたり樹木があつたりした庭は、もう影も形もない。

私は思はず車夫に訊いた。

「此處は、大きな豪家の邸のあつたところぢやないかね。」

車夫は足を留めて、

「さうです……」

「何うしたね？ 潰れたのかね。」

「え、もう、とうにつぶれました。十年先きでさ、もう……」

「さうかな、此處に好い庭があつた筈だがな。」

「さうです、さうです。よく御存じですな。」

「昔、來たことがあるから。」

「さうですか、旦那……。昔は好いところでしたアな。寺山の紅葉ッてな、町の人は瓢箪へんたんなんぞ持つて秋は遊びに來たところですがな。殿様なども昔はいらつしつたさうですよ。」

「それが何うして潰れたね？」

「もう一二代前から曲りかけてるたゞ。それに、若い方の旦那が相場に手を出したもんだから。ちよつとの間に、減茶々々になつて了つたアな。石の好いのなんか、今ぢや大分、町に入つてゐるといふことだ。」

「惜しいもんだな。それぢや、鐵工所は丸で別な人がやつてゐるんだな？」

「さうです。これは丸で別です。」

私は變らない山の姿と水の流とを見て、種々なことを黙して考へた。移り行く人生の姿といふものが、此處にもはつきりとその姿をあらはしてゐた。

「T神社の祭禮は賑やかかね。」

「相變らずですな。昔からさう賑やかな祭禮ではありませんでしたから……。」

「それに、冬だからな、お祭が……。」

「さうです、さうです。」

「今の宮司さんツて言ふ人は好い人だツて言ふぢやないか。」

「好い人は好いだが、評判はあんまりよくない……。」

「さうかね。」

「第一、曹長上りだから、學問がねえツていふ話だ。此頃ぢや、何うかかうか間に合ふツて言ふが、始めは祝辭のりごもよめねえツて、彌宜のりよしさんが皆な代理をしたな。」

「彌宜は昔からゐる老人かえ？」

「さうです。」

「前の養子の方が好かつたらう？」

車夫は駐足を緩ゆるくして、「もとの養子の方が學問だツて出來たさうだけれども、どうも道樂みちがしでな。町の女なんかに關係して、えらく金を使つたさうだから。」

「前の養子に男の子があるツて言ふが、もういくつだえ。」

「Sの中學へ行つてべ。」

「もう、さうなるのかねえ。」

「旦那、よく知つてるね。」

「昔、来たことがあるから。」

K川のT川と會するところにある長い橋は依然として昔のまゝであつた。そこを寒い西風の日に老父と一緒に通つたのは、あれはまだ昨日のやうにも思はれた。其處で老父は立留つて、YのT神社こんもりした森を指したが、矢張今でも依然としてその黒いこんもりとした森が見えた。森の上には鴉が五六羽事ありけに舞つてゐる。Y嶽の丸い頭顱の容が美しく日影に輝いて見渡された。

やがてT神社の杉森は段々近く近くなつて來た。前の養子が伐つたとかで、いくらか疎らにはなつてゐるけれども、それでも流石に古い社の森として恥



岳燒るた見りよ泉温骨白

しくないだけの威厳と壯麗とを持つてゐた。暫くすると、朱塗の社殿のさびしく其中に横つてゐるのが見え出して來た。

社殿と道を隔て、宮司のゐる家の古びた半ば崩れかけた長い板塀が右の方に見えて來た。

私は華表のところに車を捨て、そのまゝ歩いて拜殿の方へ行つた。拜殿は昔と少しも變つてゐない。大きな鈴のぶら下つてゐるのもそのままである。

森を通して込んで來た日影は、薄くその前庭を照して、其處に雜仕らしい男が、乾いたところだけを頻りに掃除してゐた。他には誰もゐなかつた。

私は鈴を鳴して、禮拜して、それからぐるりと裏の本殿の方へ行つて見た。半ば凍り半ばは溶けた路は、私の駒下駄を臺なしにしたが、それでも私は路を

拾ひく本殿の方へと行つた。

本社の朱塗の色のわるく褪せてゐるのも私に何となく淋しい思を起させた。やがて其處から引返した私は、今度は社務所の前を覗くやうにして通つて行つた。しかしその入口の障子はびつしやりと閉つて、それに連る縁側にも、人のゐる氣勢は少しも見えなかつた。南天燭の赤い實の薄く色を帯びてゐるのが見えた。

案内を請うて見やうかとも思つたが、よして、私は拜殿の前を掃除してゐる雑仕に訊いた。

「官司さんに逢ひたいんだが、何處にゐますか。」

雑仕は箒の手を輟めて、

「宅にゐるべしよ。」

「向ふですか。」

官司の邸の方を指して見せると、

「さうだ。あそこだ。」

「社務所には来ないかね。」

「まだ中々来めい。午すきでなけりや——。」

仕方がないので、私は華表を出て官司の邸の方へと行つた。車にはそこに待つてゐるやうに命じて……。

【四】

私の眼には再び昔の門と塀と古びた玄關と、玄關の六疊の真中に立つてゐる衝立とが映つた。家も庇も唯古くなつたばかりで、別に變つた處もなかつた。

薄い午前の日影が庭の樹の影を此方にまで長くうつしてゐた。

私は暫し立盡した。不思議な心持で、また始めてその宮司に逢つて見るといふ好奇心で……。

やがて私は案内を請うた。と、奥から返事がきこえて、つゞいて丈の低い肥つたあから顔の四五六の袴をつけた男が出て來た。私は丁寧に辭儀をして、道興准後の歌を見たいために此處に來たことを告げ、出来るならば、宮司に逢ひたいと言つた。と、其男は、私の出した名刺はよくも見やうともせず、「まあ、お上んなさい」と言つて、私を上へ請じた。

「貴方が宮司さんですか。」

席に就いてから、かう私が訊くと、其男はニヤ／＼笑つて、「自分が宮司である」と告げた。

私はその宮司と相對して坐つた。その導かれた室は、矢張、昔私が老父や義兄と同じやうに導かれた室で、長押の額も、室の隅に置かれてある和書の本箱も、長くぐるりと取廻された縁もすべて同じだ。其時は庭の花が満開で、その影が障子に移つてゐたが、今はその代りに庭の樹の枯枝がさびしく映つて見えてゐた。今、私と宮司と相對して坐つてゐるところから少し左に離れて、私と老父とは坐つたのであつた。

私は不思議な氣がした。時といふものが永劫にして且つ一瞬であるといふやうな感に撲たれながら、私は凝と前に坐つてゐる宮司の顔を見た。野卑ではるが、莞爾としたところに何處か人懐こいといふやうな處があつて、眉の太いや、體格のがつしりしたのや、態度の軽いところなどがその以前の兵營生活をそれとなく現はしてゐるのを私は見た。と同時に、もしあの時縁があつて、此處

に来てゐたならば、自分も矢張かうした宮司になつてゐるのだなどと思つた。私は宮司と種々な話をした。道興准後の歌の短冊はあるにはあるが、當社に取つては、大切な寶物なので奥深く藏つてあるので、ちよつと出して來て見せるわけには行かないといふ語氣であつたが、私はそれを達つて望んだ上に、金を一圓紙に包んで出したので、『それではちよつと待ちなさい』と言つて、宮司は奥に入つて行つた。

私は一人でその昔の室の空氣をなつかしむことを得たのをよろこんだ。そして立つてあちこちを歩いて見た。長押にかゝつてゐる本居豊穎の額、古事記傳と書いた本箱、その他祭禮の時に使用するらしい道具の竝んでゐる處などを私は歩いた。庭に面した方の障子を明けると、其處には、落葉の一杯にたまつた池があつて、向ふに破れた障子の徒に白いのが見えた。

子供を叱つてゐる母親の聲がふと私の耳に入つた。それはその當年の紅い裳裾の持主であるに相違なかつた。私は黙つて其の氣勢に耳を傾けた。

何でも二人の子供の争つてゐるのをなだめたり叱つたりしてゐる母親の聲だ。もうかなり年を取つた女の聲だ。何方かと言へば、やさしい、十分子供のいめしも出来ないといふやうな聲だ。

紅い裳裾とこの聲との間にいち早く過ぎ去つて了つた歲月、それを考へると、種々なことが私の胸に集つて來て、其間に起つたいろいろな光景……この事件に關係も何もない光景まで一つ一つ浮んで來た。やがてまた急瀬となり奔湍となる自分の將來のライフがそれとなく眼に映つて見えた。私はちつとして立盡した。

宮司は容易にやつて來なかつた。かれの言つた通り、その道興准後の歌は奥

深く藏つてあるものと見える。私はやがて座に戻つて、冷えた茶を啜つて、巻煙草を静かに吸つた。薄青い煙は、冷めたい室の空氣の中に巴渦をなして靡いて行つた。

やがて宮司は大きな古い桐の箱を持つて入つて來た。今度は着物も着替へて、亂れた髪なども直してゐた。袴も白い袴にはき替へてゐた。

重々しくそれを其處に置いて、『これは、當社の寶で、東京の大學にも度々出して承認を経たものですから、普通には、容易にお眼にかけないやうになつてをりますのですが、折角の御望みだし、そのために、わざ／＼此處までお出でになつたと言ふことです……特に異例として御眼にかけますが……』かう言つて勿體らしく桐の箱の紐を静かに解き始めた。

桐の箱には、『道興准后自筆の御歌』と書いてある。依然として元のまゝであ

る。宮司はそれを明ける前に、道興准后が此處に來て泊つた時の話をぐどぐどと話してきかせた。『Sから此方にお出でになつて、そして當社にお泊りになつた。その時、丁度花が眞盛で、それで此のお歌をお詠みになつたのですが、その頃は當社も盛で、社なども餘程大きく、禰宜、雜掌なども非常に多かつたといふことです。今から丁度四百年前……』二十五年前に矢張かうして前の代の宮司が話したことを私が思ひながら、つとめて眞面目にその話を聞いてゐた。

『梓弓八槻の里の櫻がり花にひかれておくる春かな』といふ道興准后の自筆の歌は、やがて私の眼の前に展かれた。

私はじつとそれに見入つた。

『成ほど立派な寶物です』かう言つて、私はさも歴史家でゝもあるやうに、又は古文書鑑定家でゝもあるやうに、眞面目に心から感心したやうに言つて、そ

れを宮司の方へ戻した。

「それでは、もう藏つても宜しいですか」かう言つてから、宮司は恭しくそれを元の箱に藏めて、丁寧に紐を結んだ。

それから私達は猶いろいろと話をした。宮司は茶を私の前の茶碗ちやわんにつがうとしたが、冷えてゐるので、手を鳴した。しかしそれは容易に通じなかつた。

宮司は立つて行つて、「おい、こら……」と呼んだ。

と、奥から人の来る氣勢がしたと思ふと、小さな丸鬘に結つた四十二の妻らしい女が出て来て、宮司の手から急須を受取つて、そして再び奥に行つたが、今度入つて来た時には、それを其處に置いて、それから丁寧に私の方を向いて挨拶をした。私は嬉しかつた。私は初めて今紅い裳裾の持主と顔を合せたのであつた。

私は背の餘り高くない、若い時もさう大して綺麗ではなかつたらうと思はれる小さな色の淺黒い顔を見た。私が長い間想像したやうなロマンチック色彩は何處にも見出すことが出来なかつた。普通の田舎の妻、半ば老いた妻を私は唯發見した。

「奥さん！」しかし私は呼びたかつた。「奥さん、貴女は私を覚えていらつしやいますか」私はかう言ひたかつた。しかし、今更そんなことを言ひ出して、靜かな池に石を投げ込むやうなことを私はしたくなかつた。私は何も彼もこのまゝにして置きたいと思つた。その方がロマンチックだとも思つた。しかし、宮司の妻はそんなことは少しも知らずに、茶を一杯づいで、私に勧めて、そしてそのまゝ、奥へへ行つた。その母親が昔曾て私に茶を勧めたと同じやうにして……。私は猶ほ宮司と相對して、この地方の話などを何彼とした。餘りいろ／＼な

ことを私がよく知つてゐるので、後には、『T町へお住ひになつたことでも御座
んですか』などと宮司は訊いた。

私はしかしその事については、竟に竟に一言も及ばなかつた。やがて私は暇
を告げた。一種言ふに言はれない満足と不思議とロマンチックな印象に撲たれ
つゝ、又は過ぎ去つて行く歲月の意味を深く噛みめたやうな感じに撲たれつゝ。
『や、何うもお世話でした。』

かう言つて別れて此方に來た私は、ふと、その右の方に薄日を帯びてひろく
ひろけられたところに、五つと四つ位の男の兒と女の兒とが、頻りに鞠をつい
て遊んでゐるのを見た。そしてその傍の井戸端では、さつきの妻女が盥たらいに向つ
て頻りに何か洗濯をしてゐた。

霜にぬれた青い野菜畑、此方から其方へかけられてある物干棹、色の褪せた

メリンスの女の兒の被布、鞠の動くにつれてきこえて來る無邪氣な鞠唄、さう
いふものが丸で一つの繪か何ぞのやうに私の眼に映つて見えた。

私はちよつと立留つた。しかし、その妻女は振り返つて見ようともしなかつ
た。洗濯の手を動かす度にその低頭いた小さな丸髻まるまげが微かに動いた。

『幸福はかれ等の上にあれ——』かう思つて私はやがて其處から出て來た。子
供等の鞠唄の聲は猶靜かにきこえた。

Happy
on them

Robinson
Crusoe
on the hill.

山のロビンソン・クルウソー

「一」

111

凄しい風雨が終夜續いた。絶壁ぞつべきに觸れて切々きりぎりになつた風の吠えるやうな聲、
空の底が抜けたかと思はれるやうな土砂降りの雨の音、その雜り合ひちりちり纏れ合
つた底には、猶ほ一種の凄じい音響があつて、それが世界の基盤きばんを揺がすかの

山のロビンソン・クルウソー

やうにすら思はれた。其他種々雑多な音響がそれに雜つて大きく小さく低く高く聞えた。樹の撓ふ音、深山の草葉の纏るゝ音、崖の崩壊したかと思はれるやうな音、巨人の嘯いて来るやうな音、中でも凄じく増水したらしい谷川の瀬の音がかれ等の心を非常に不安にした。

二人の一夜を明かさうとして選んだところは、山からずつと下りて、下に谷川の流れの聞える地點であつた。かれ等の今度の山の探險は半ば失敗した。最初の日は、それでも、N岳の半腹まで攀つたが、岩石が鋸のこぎりの齒のやうに鋭くきつ立つてゐると、しかも、その岩石の質が脆く、ともすれば碎けて落ちさうなのとで、危険で何うしてもその頂まで達することか出来なかつた。ぢき近くその頂が見えて居ながら、無念にもそこから引き返さなければならなかつた。仕方がないので、かれ等は兎に角そこまで行つたといふことで満足した。

『おい暴虎馮河の勇た！ もう引返さう！』かう言つて、かれ等は登る時よりも却つて困難な岩石に縋り縋り下りた。あの石が崩れて落ちたら……かう思つてもぞつと身の毛のよだちさうな絶壁の間をも、又は餘り恐ろしいので手や足や體が震へて仕方がないやうな岩石の重疊ちやうでました間をも、深い深い熊笹が無限に生ひかぶさつて、その間を分けるにすら一方ならぬ困難を感じた密林の中をも……。

かれ等はN岳の絶頂を極めて、それからO岳とT岳の間を越して、向ふに出るつもりの計畫を立て、來た。かれ等は五日行程の食糧を背負袋に負つて、山添ひの停車場から勇みに勇んでこの深山の中へと入つて來た。K岳の露營地點では雄大な山巒さんらんの重疊する間から、とても世間では見られないやうな朝の日の出の壯觀を見て歡呼の聲を擧げた。かれ等は若くつてそして健やかであつた。

かれ等の眼は輝き心は溢れ體には若い血が漲つてゐた。

しかし、N岳からO岳に行く間で、かれ等はその最初の計畫を無念ながら捨て、了はなければならぬことを知つた。好晴であつた二日目は過ぎて、三日目の午前からは山は雨模様になつた。雲が大きな鳥の翼のやうに、又は凄じい恐しい怪物のやうに山から山へ蔽ひかゝつた。第一かれ等は展望の十分に出来ないのに困つた。次に、びしよびしよと根氣よく降る雨に困つた。蝙蝠傘で防ぎきれず全身濡れそぼちて了ふのに困つた。行つても行つても盡きない熊笹と密林とに困つた。ところどころで、かれ等は自分達のゐる位置を知るために、五萬分の地圖をひろけて、磁石を其上に置いて、そして頭を鳩めて相談した。『さうだ、さうするより他仕方がない。……もうとても先へは行かれない。先へ行くのは危険だ。それよりもこの谷に添うて下つて行くのに限る。さうすれば、ひとり手にSかTかに出る……さうしよう』かう言つて、かれ等は漸くその方に決心を固めた。

二人の一人——體の大きい方の青年は、折角計畫して來たことの目的を達しないを無念がつて、さう決心するまでも、度々前進説を持ち出したが、何う研究して見ても、この雨ではとても行けさうにも思はれないので、止むなく、それにすることにして、それから方向を今までとは反對の方に取つて、谷へ谷へと添うて下つた。幸ひにして、かれ等はその日の午後に、木樵まきくわの通ふらしい細い一條の道を發見した。

『もう大丈夫だ』

『まア、これで安心した』

かう言つて、かれ等は愉快さうに詩を吟じた。雲は灰色の無窮の壁でもある

かのやうに山から山を深く深く罩めた。時には深い谷を埋めるやうにして、半は白く半は灰色の雲がもくもくと渦き上つた。かれ等は終日谷に添うて下つて、日暮近く、雨にぬれそほちながら、漸くある絶壁の下の洞穴ほらなをさがして、そこに一夜寝ることにした。

【III】

「えらく降るなア」

餘りに凄すさまじい暴風雨に落附いて眠つてゐられない青年の一人は、かう言つてがばと起きた。

「本當に降るな。嵐だ……」

矢張眠られなかつたらしく、體の大きい青年も起き返つて、「ひどい暴風雨になつたな」

「大丈夫かしら……この岩が落ちるやうなことはありやしないかしら……」

「それは大丈夫だが……水が出やしないかと思つて、それがさつきから心配になつてゐるんだ」

「出ても涉わたれないやうなことはあるまい」

「あるまいとは思ふけども……」

闇やみに顔を見合せて、

「えらい目に逢つたな」

「仕方がない」

かれ等は沈黙した。體の大きい方は、煙草を吸ふので、外套のポケットの中をあちこちとさがして、雨にもしめらない蠟マツチを出したが、次手に蠟燭を

一本出してそれに火をつけた。

狭い洞窟の中が、これでいくらかはつきりと見えるやうになつた。濡れをほちた背負袋、外套、雑糞ざつふ、さういふものゝ中に、かれ等に互に不安さうな蒼白い興奮した顔を發見した。それに山の夜は寒かつた。外套を着ても、かれ等は寒い胸震むねふるひを禁め得なかつた。

凄じい風の一霎ゆきが突然そこに入つて来て、蠟燭の灯を吹き消しさうにした。背の低い青年は立つて、それを奥の、風の來ない方へ持つて行つた。

轟と大地を揺すやうな風雨の底の音があたりに鳴り響いた。雨は車軸を覆へすやうに降り頻つた。

二人はじつと黙つてその凄じい氣勢と音とに耳を傾けるやうにした。深山の暴風雨、それはかれ等が世に生れてから始めて出會したもので、それはかれ等

に取つて、未知の恐ろしいものゝ迫つて來たやうに思はれた。恐ろしいものが、驚かるゝものが、滅亡が自分等の體や魂に近く迫つて來たやうに……。

かれ等は黙つて顔を見合せた。

暫くしてから、

『壯絶には壯絶だな』

かう體の大きい方が言つた。

『ウム』

かう答へて、猶吹き荒るゝ風雨に耳を傾けるやうにして、『これがつゝかれちやたまらんな』

『そんなことはないがな』考へて、『唯、水か出なけりや好いがな。……何しろ、この谷はこれから少し行くと、下流は絶壁で、添つて下つて行くことも何うす

ることも出来ないんだからな」

「さうだな……」

「まア、仕方がない、取越苦勞をしたツて仕方がない。その時はその時だ……」

「なうとも……」

またかれ等は黙つた。風雨の吼える音、樹の撓ふ音、谷川の流るゝ音は暗夜の中に凄じく鳴つてきこえた。

【三】

あくる朝は風はいくらか落ちたけれど、雨は依然として降り続いた。雪がすぐそこまで来て、かれ等の避難した洞窟を塞ぐやうにした。

しかし何うすることも出来なかつた。かれ等は辛うじて、紙屑やらマッチの



む望を山士富及木並の傍近莊來去歸

箱やらを燃してそれで火をつくつた。米はまだそれでも二日分位残つてゐるが、これから先、何んな艱難に出會すかわからないと言ふので、成るべく少量をアルミニウムミニウムの小さな鍋に入れて煮て、そして罐の中から福神漬を出して來て食つた。「まだ食ふか。さうか。まだ二杯きりか。ぢや、半分づゝ食はう。それで午まで我慢することにしよう」かう言つて、二人は残つた飯を二人で半分づゝよそつて食つた。

幸ひに、附近に、燃料ねんりょうがあつたので、洞窟の中で火をつくつて、そしてかれ等は濡れた外套や洋服を乾かした。外套の上からは、白い氣が立つて、物の乾く匂ひがあたりに満ちた。

洞窟の中は、火の力で、シャツ一つでゐても、さう大して寒くない位の暖味を持つて來た。

『この吹降りぢや一步も出られないな』
『本當だ……』

かう言つたが、『でも、その中、小降りになつたら、出て川を見て來なくちやならない。一番心配なのは川だ』

『さうだ……』

『餘程あるがな、川まで……』

『なアに、ぢきだ』

『今、行つて見ようか』

『もう少し小降りになつたら……』

ところがその日は終日外に出ることが出来ないほど暴風雨がつゞいた。

それでも氣になるので、かれ等はかなり強く荒れる中を、蝙蝠傘をさして、

谷の方へと出かけた。それはもう夕暮近い頃であつた。をりをり傘が松茸のやうにならうとするので、かれは風に逆らつて、柄元を堅く握つて度々立留つた。路はついてゐるが、谷まで下りて行くのは容易ではなかつた。かれ等は熊笹の肩を没するやうなところだの、密林の深く續いてゐるやうなところだのを傳つて下り行つた。近づくにつれて、轟と鳴る谷の音は凄じく脚下に鳴りひびいた。林の中から、ちぎれた雲霧の中から、一目下に谷を見下したかれ等は、絶望の聲を挙げずにはゐられなかつた。あの綺麗な水の流れてゐた瀬が、岩から岩へ何の苦もなく傳つて渡つて行けさうに思はれた谷が、一面に濁流に満されて、凄じい勢で——石も岩も何も彼も流されて了ふかと思はれるやうな勢で凄じく奔張してゐるのをかれ等は見た。

『これや大變だ……』

かう異口同音に言つた二人の顔は急に蒼青あざあざになつた。

「困つたな！」

「これぢやとても渡なれい……」

かう互に言つて、じつと下に横つた谷を二人は見下した。昨日涉つて置けば好かつたと後悔しても仕方がなかつた。

「だから、僕はあの時、さう言つたんだ……」體の大きい方の青年は、その時を思ひ出すやうにして言つた。

「だつて、あれからぢやアとても渡れない。疲れてゐたんだもの」

『それは疲れてはゐるたけれど、無理に涉りや涉れないこともなかつたんだ。残念なことをしちやつた……』

「……………」

何うすることも出来ないので、かれ等はさすがに灰つて來た。途中では、又風雨の一霎ふきに逢つて、背の低い方の青年の蝙蝠傘は松茸のやうになつた。

「あゝなつちや、とても涉れない……」『あの水は一體、幾日経つたら引くだらう』つゞいてもう残り少なくなつてゐる食糧のことが二人の氣にかゝつた。しかし二人はその必至の問題については何も話さなかつた。二人は黙つて林の中をわけてその洞窟へと戻つて來た。

風雨は容易にやみさうにもなかつた。

【四】

不安はかれ等をじつとさせては置かなかつた。かれ等は眞面目に種々なことを話し合つた。軽い心持でゐることなどは出来なかつた。

「仕方がない、萬止むを得なければ、あとに戻るのだけれど、兎に角この雨ぢや仕方がない……。それに心配なのは、此方に來る時わたつて來たあの川、あの川も水が出やしないか」

「さア……」

「あれが渡れないとすると、あとへも歸れなくなるんだが……。困つたな、本當に困つて了つたな」

「しかし、あの川は大丈夫だらう。あんな小さな川だつたから」

「何ともわからんよ。……」體の大きい方は考へて、「一夜の中にあんなに水が出て了つたんだから——。まア、兎に角、明日は是非行つて見なけりやならない。そこで涉れないとすると、それこそ眞劍しんけんに考へなくちやならないから」

「本當だ……。困つちやつたな」

「米だつて、もうありやしないからな」立つて行つて、背負袋に残つてゐる食糧をしらべて見て、『でも、儉約すりや、一日はあるけれど……。かうと知れば、もつと儉約して來りや好かつた』

「それは駄目だ……。こつちの山なんかむやまに無闇に入つて行けや、出られるものが猶ほ出られなくなつて了ふ……。この奥は、去年落合屬の行方不明になつた南アルプスの連嶺だからな」

「困つたな」

背の低い方は、かう言つて、地圖の上に首を低かれて、N岳Tと岳との間の凹所に線を引いて見せて、『この路はいけないかしら？ この山を越して、谷へ出て……』

「だつて、この川は矢張涉らなければやならないんだもの。この谷だつて、無

論水は出てるに違ひないんだから……」

「さうだね……」

「まア、仕方がない。出来るだけのことを盡すより他に術がない。まア、兎に角、この雨が止まなくちや——」

「本當だ……明日は止むだらう」

「止めば好いがな」

かういふ話が盡きずに出た。しかし、二人は何うすることも出来なかつた。

二人は學校でも交情の好い間柄であつた。體の大きい方はある辯護士の息子、背の低い方はある商人の息子であつた。二人はいつも一緒に歩いた。難しい數學の問題や世間の話や家庭のことなど迄も互に奥底なく語り合ふ仲であつた。辯護士の息子の方が亭主役なら、商人の息子は女房役といふ風なところもあつ

た。二人は夕飯をさびしくすましたが、不意に湧き出した運命に面しては、いつものやうに快活に話も出来なかつた。多くは不安と悲哀と絶望とに封じられたもの、やうに黙つてじつとして坐つてゐたり、外套の上にごろりと横になつたりした。蠟燭ももうたんと残つてゐないので、儉約して早くから消して了つたが、外ではまだ吹降りが止まない。洞窟の中ではをりをり二人が轉輾反側するのが微かに聞えた。二人は互に東京のことや家庭のことなどを思はずには居られなかつた。いづれ此暴風雨は東京も荒したに相違ない。荒さないまでも、新聞で此山岳地方の暴雨風を報じてゐるに相違ない。さぞ親達は心配してゐるだらう。去年の學生の慘事^{さんじ}などをくり返してゐるだらう。だからあれほど留めたのに……と言つてゐるだらう。と。辯護士の息子の方では、停車場の村で商人の息子が是非案内者を一人伴れて行かうと提議したことなどを思ひ出して、

「何故あの時一人つれて来なかつたらう」など、後悔した。ついで、兎に角、あの村では自分等二人が山に入つて来たことは知つてゐるから、事に依れば、捜索にやつて来ないとも限らない……。しかし、それもつと日の経つてからでなければ来ないにきまつてゐる。と思ふと、自分達が飢ゑて死んで了つたあとに、大勢村の人達のやつて来るさまなどが想像された。ついで此洞窟の中に横つてゐる二つの死屍に涙を流してゐる親達や兄弟の姿などが見えた。「僕の責任だ……今度の計畫をしたのも僕、無理に伴れて来たのも僕、案内者も雇はなかつたのも僕だ……。僕は全責任は帯びなければならぬ」かう思ふと辯護士の青年は、かうしてじつとして寝てゐられないやうな気がした。いかなる方法を講じて、又はいかなる艱難に處しても、九死一生を得なければならぬと思つた。「明日は雨が降つてゐても、何でも構はん。来た時に渡つて来た谷川

を見に行かなければならぬ」かう思つたが、しかもかれはすぐその傍に、これも矢張り眠られず轉輒反側してゐる友達に話しかける元氣はなかつた。

商人の息子は、一層深く家のことを思つた。年老いた祖母、半ば頭髮の白い父親、中でも自分にのみ生命の糸を繋いでゐる母親のことが氣にかつた。自分が屍になつたのを聞いたら、そのまゝかの女は氣が狂つて了ふかもわからなかつた。何故、あの時あれほど留められたのを振り切つて出て来たらう。かう思ふと、堪らなくさびしくなつて来て、かうして寝てはゐられないやうな氣がした。案内者をあそこで雇つて伴れて来なかつたことなどを繰返して悔まれた。そればかりではなかつた。ついで、自分はこれで死ななければならぬのかと思ふと、何とも言はれない焦燥した心持になつた。かれは深い溜息をついた。「何うした？ 寝られないか？」

「ウム」

「しかし仕方がない。かうしたハメになつたからツて絶望ばかりしては居られない。又絶望してばかりしてても仕方がない。兎に角、明日はあの川のところへ行つて見て、それでいけなけりや又考へ直す方法もあるんだ。米だつて、一日分はあるから、儉約すれば、二日や三日は生きてゐられる。その中には天氣になる……水も退く……。何アに、心配ばかりしてゐたつてしやうがないよ」

「それはさうだ」

「氣を大きく持てよ。この位の困難に遭遇してへこたれるやうなことでは仕方がないからな……。氣をしつかり持つてゐなくちや駄目だぜ」

「それは大丈夫だ……」

「何アに、心配することはないよ。人間は一週間やそこら物を食はないでも生

きてゐられるんだから」

かう言つた辯護士の息子は、ついさつき一週間もかうしてゐなければならなかつた時は何うしやうと思つて戦慄したのであつた。

「さうとも……それまでには、何うかなるからね」

「まア、大膽に落附いてやるんだね」

また黙つて了つた。長い間二人は闇に眼をあけて、種々な妄想の頭を往來するのを凝と見守つてゐた。しかし、疲れてゐるかれ等はいつか眠つたと見えて、商人の息子が、恐ろしい夢からさめた時には、體の大きい方の青年は高い躰を立て、寝てゐた。戸外では風雨ももう半ばやんだらしく、ザアと降る雨の音はしても、山もどよむやうなあの恐ろしい世界の底の氣味のわるい響きはもうきこえなかつた。

『五』

翌朝は早く出懸けた。すつきり拭つたやうに晴れたと言ふ譯には行かなかつたけれど、空のところどころに碧空が見えて、雲が到るところの谷に漲り溢れた濁流の響は凄じく行く手の絶壁に反響して聞えた。

かれ等は不安さうに黙々として歩いた。一昨夜來の暴風雨の凄じかつたことは到る處に其痕跡を留めてゐるので知れた。大きな樹が將棋倒になつて倒れてゐたり、屋のやうな岩石が絶壁の上から崩れて落ちてゐたり、草といふ草が薙ぎ倒したやうに折れ伏してゐたりした。ある低い崖はすつかり崩れて、そのため、路が塞がれて、そこを通るためにかれ等は遠い遠い大迂廻をしなければならなかつた。

『えらい暴風雨だつたんだな！』

再びその光景を眼の前に浮べるやうにして、辯護士の息子は言つた。

『本當だ……東京も荒れたらうな』

『荒れたらう、これちや——』

『心配してゐるな、屹度』

辯護士の息子はそれに答へなかつた。いくら心配して貰つても仕方がないやうな位置にゐることをかれは思つた。心にはそれを遮る空間と言ふものがない。此方と向うと、山を隔て、川を隔て何十里を隔て、互に瞬間に、しかも多分は同時に互にその身の上を思ふことが出来る。丁度無線電信のやうに通ずることが出来る。しかしそれは心だけである。いくら心配して貰つても、これを通ずることが出来ないのであるから詮かない……。こんなことを思ひながらかれ

は歩いた。

行く行くかれ等の唯一の希望——元に戻る路の途中にある谷を、渉ることが出来るやうにと祈つた心も次第に覺束なくなつて來るのをかれ等は感じた。あらゆるところに、水が漲つて溢れてゐた。こんなところに川があつたかと思はれたやうなところにすら濁水が溢れて凄じく流れてゐた。

「これはとても駄目だ……」

辯護士の息子の方は、かうは思つたけれど、失望させてはと思つて、それを口に出しては言はなかつた。

近いと思つたが、そこまでにも一里以上あるのをかれ等は感じた。漸く見覚えのある絶壁のところへと出て來た。林がある。たしかにこの林だ。この林の入口のところで一昨日疲れて三十分ほど休んだ。これを少し下ると、小さな谷

があるのであつた。

二人は萬一を期待して、急いでその谷へ下りて行つた。

忽ち濁流の凄じく巴渦を卷いたさまがかれ等の眼の前にあつた。幅二十間もあらうと思はれる奔流が岩石の間に迅く凄じく瀬をつくつて流れてゐた。

「これは駄目だ」

「とても駄目だ……」

「困つたなア」

かれはかう言ふより他仕方がなかつた。かれ等は岸の石に腰を掛けたり、林の中を歩いたりして、絶望したやうに凄じい濁つた奔流を唯だ眺めた。空は今
は漸く晴れて、午前の日影が晴れやかにあたりを照した。

『六』

幾日の後、谷川の徒渉の出来るまで水の減するのを待つか、でなければ心配して村の人達の迎へに来るのを待つか、でなければ生命を賭してこの濁流の奔^{ほん}漲^{ちやう}の中を渉るか、これより他には何うすることも出来ないハメに陥つたのをかれ等は見た。しかしかれ等は絶望してばかりは居られなかつた。兎に角、かれ等は元の地點へと引返して、そこで徐に考へることにした。

とても現在残つてゐる食糧では、減水の時期を待つては居られなかつた。かねて山の水は出るのも早い、引くのも早いとは聞いてゐるが、さりとてその凄じい奔漲が一日や二日で元のやうにならうとは思はなかつた。五日、六日、一週間経つても或は駄目かも知れない。減水を待つと言ふことはつまり餓死^{がし}を

待つことである。又、一週間位は飲まず食はずに生きてゐることが出来ても、その中に雨が降つたり、暴風雨があつたりしないとは限らない。さうすれば、半は犬死に均しいやうなものである。

しかし、漲る川を見ては、何うすることも出来なかつた。時にはこの近所に山林の小舎がありやしないかといふ想像がかれ等を捉へた。兎に角、かうしてこゝに青年が二人窮地に陥つてゐるといふことを知らせる必要がある。かう相談して、二人は大きな聲で『オウイ、オウイ』と連呼して見た。

『オウイ、オウイ』

その聲は草木に反響し、こだまに反響し、絶壁に反響して、あたり高く聞えた。絶壁に反響したものは、却つて此方へ戻つて来て、誰れか向うの山中に人がゐるに答へてゐるやうにも思はれた。

かれ等はその反響に耳を聳そはたてた。

『あれは、こつちの聲だよ』

『さうかな、誰かゐるやうだな、返事をしてゐるやうだな』試みに、『オウイ——』と大きく呼ぶと、少し間を置いて、それと同じく『オウイ』と聞えた。

『それ見ろ、反響だ……』

『さうかな——』

そしてその聲がやむと、谷の瀬の鳴る音が——凄じく轟と鳴る音が、かれ等の苦痛に何の影響も反響も持たない冷酷れいこくに依然としてひびいて聞えた。

午後は辯護士の息子の考へで、兎に角、涉れるか涉れないかを研究して見る必要があると言ふので、夕暮近くまでかれ等は川の岸を彼方へ行つたり、此方へ行つたりした。林の中に逍遙せうごうつたり、岸の大きな石に上つたり、岩から岩へ

涉つて見たりしてゐるかれ等の姿は、すっかり晴れた明るい日の光線にそれと浮き出すやうに見えた。

しかし、さまざまの苦心の結果も、今ではとても駄目だといふことに歸した。それも大きな鋸なり山刀でもあるならば、木を伐り倒して、それを重ねて岩から岩へとわたして行くことも不可能ではないけども、ナイフ一挺、小刀一挺しかないかれ等には、とてもそんなことは望めなかつた。それでもかれ等は注意して、樹に下つてゐる蔦つるやら、藤ふぢ蔓つるやらをさがした。とても出来ることではないかも知れないが、しかし、『蔓は何ぞの用に立つかも知れない。少し集めて置かう』かう言つて、一時は熱心にその蔓を林の中にさがした。

ふとあることを思ひついたやうに、辯護士の息子の方は言つた。

『ちよつと、僕の水筒を持つて来て呉れないか』

『何うするんだ？』

『好いことをするんだ……』

『何うするんだ……』

『まア、持つて来て呉れ』

で、商人の息子の方は、駈け出して、洞窟の方へ行つた。暫くして、その水筒は持つて來られた。

辯護士の息子は、かねて讀んだ山岳會の雜誌の記事——窮地に落つた時の不時の注意、それをふと思ひ出したのであつた。かれはポケットの中から手紙を出して、それを二三枚破つて、それに、出水のために渡渉することが出來ないので困つてゐる學生二人がこの山にあることを記して、そしてそれを水筒の中に入れて、川に流してやることに思ひ附いた。雜誌には、^{びん}罐か何かの中にと書

いてあつたが、罐がないので、それで水筒を犠牲にしようとかれは思つた。

『兎に角、僕等のかうしてゐることを下流に知らせる必要があるんだから……』

『それは好い。好い思附きだ』

かう言つて、商人の息子もそこに微かながら一條の活路を認めたとやうな氣がした。

體の大きい方は、鉛筆でそれを詳しく書いて、これをもう一人の方に見せた。

『これで好い』かう言つて商人の息子は返した。

『わかるな』

『わかる……』かう言つたが、『僕の水筒も流さうか』

『さうさな、多い方が好いけれど……まア、一つ流して見よう』

で、その書いたものを小さく疊んで、口の中から無理に入れて、それに固く

栓をした。で、かれ等はそのまゝ川の岸へと下りて行つた。

初めはそこから流さうとしたが、途中でつツかゝつて了つては駄目だからと言つて、辯護士の息子は、それに自分等の生命を託すかのやうに、眞面目にワン、ツウ、スリイとかけ聲をして、そしてそれを漲りあふれた濁流の中に投り込んだ。

水筒はちよつと沈んだか、やがて浮いて、激流の中を流れて行つた。かれ等はちつとそれを見送つた。

辯護士の息子には、しかしこれが却つてさびしい悲しい心細い思ひを起させた。この谷は末はMの傍を流れて、F川に注ぎ込んでゐる川であるが、人跡の至らない間を五里も六里も流れて行つてゐる有名な荒川である。果してそれが人の目に觸れるだらうか。沿岸の民の竿の鍵に引上げられるであらうか。また

引上げられたにしても、その中に入つてゐるものに氣が附いて、人が出して見るであらうか。また出して見たとしても、すぐ人が救援に赴いて来て呉れるであらうか。かう思ふと、その水筒がある岩と岩との間に懸えられて、永久に流れずに留つてゐるさまなどがわるく想像されるのであつた。

『まア、あてにはなららん……しかし、またさうした奇蹟もないとも限らないからな』

『さうだとも……』

かれ等は日が暮れてから、勞れてその洞窟の中に歸つて來た。

『七』

ロビンソン・クルウソーの生活よりも、もつとわるい生活が思ひもかけずにか

れ等の間に始まつたのであつた。かれ等はあくる日もまたかれ等を希望の絶えた冷めたい洞窟の中に発見した。

持つた來た米は、もう朝の分と晝の少量を残しただばかりであつた。成るだけ多くするやうに粥に伸した飯をすゝるのもかれ等には悲しかつた。

一しきりまたかれ等は『オウイ』『オウイ』を連呼した。

反響が徒に響いて來た。

これがロビンソンのやうに、食糧シホクリヤウの豊富な島ならば……又その貯蓄に餘裕があるならば、かれ等若い心を取つては、かうした生活も面白いものゝ一つであつたであらうけれど、餓を前にしては……餓死を前にしては、さうした落附いた心ではとてもゐられなかつた。

幸ひに天氣は好かつた。今朝は胴震タウジンひがするほど寒く、穹窿クウリウを劃かきつた高山の

線がくつきりと碧い空に際立つて眺められた。此間登つたN岳からO岳へ連互がはつきりと指された。

林には秋の日影が美しくきらきらと輝き、鳥は何の苦しみもない様に鈴を振るやうな聲を立て、鳴き、草原の中には紫や白や黄い花が一杯に咲いて、中には赤い實なども見えた。

それが却つてかれ等には皮肉に冷めたく感じられた。

かれ等はまた河岸へと出かけて行つた。今日も『オウイ』『オウイ』の連呼をやつたあとで、山を越えて出る路を求めやうといふ相談が出たが、いくら考へ見ても、とても食糧なしでその高山の連互を突破する希望は出て來ないので、それはよして、そして川の方へへ行つた。

川の水はいくらかは減つたやうではあるが、まだとてもそれを渉ることなど

は出来なかつた。

二人は林の角で、昨日もやつたやうに、長い間石に腰かけて、凄じく漲つて流れる谷を眺めた。商人の息子には、昨夜見た夢——谷の水が一夜に減つて、樂に涉つて行けた夢のことなどが思ひ出されて、急に悲しくなつたといふやうに顔を曇らせた。二人は唯顔を見合せた。

商人の息子の持つた方の水筒は、来る時買つて来たまだ新しいものであつたが、その中にも遭難の事情を詳しく書いた手紙が入れられて、昨日やつたやうに、そこから川の中流へと向つて投げられた。

『かうして、唯、川を眺めてばかりても仕方がない』辯護士の息子は、かう言つてやがて再び彼方此方と林の中を藤蔓とさがし始めた。蔓の蔓は脰うしろくつて役に立ちさうにもないが、それでも無いよりはと思つてそれを集めた。

藤蔓は割合に少いので、かれ等は林から林へと彷徨つて探した。かれ等はもう眞剣であつた。兎に角、それより他には、自力方面でこの窮地を脱して行く方法はなかつた。かれ等は樹の幹に上つて、小さなナイフで太い蔓を伐つて歩いた。

時には林の角の草藪くさぶさの上にさも疲れたやうにごろりところがつて休んでゐたり、また勇氣を振り起しては、勞れた足を引摺つて、林の中に入つて行つたりした。

無駄とは知りながら、時々『オウイ、オウイ』と連呼した。

食糧を皆な食つて了つた後では、もうアルミニウムの鍋も不用だと言つて、これにも遭難の文句を書いて蓋を落ちないやうに丁寧に糸でくゞつて、矢張川の真中に投げ入れた。

鍋はふわふわと流れて行つた。
辯護士の息子は言つた。「鍋が屹度一番有効だ。途中で、岩に支へられさへしなければこれは、屹度岸に引上げられる。さうすれば屹度蓋ふたをあける。見る。たしかに、これが一番有効だ……」

「八」

「危いぞ……」

「何アに、大丈夫だ。何うせ命賭けの仕事だもの、手をつかねて他力たからを待つてゐるよりも、この方が男らしい……」

辯護士の息子の方は、かう勇しく決心したやうに言つて、長い間かゝつて集めた大丈夫さうな藤蔓をしつかりとつないで、それを先づ岸の近くに立つてゐる

る梅つばきの大きな樹に結び附けた。かれは兎に角全力を盡して、この暴漲した流れに、原始時代のやうな蔓の綱を對岸までつながらうと思ひ立つたのであつた。

漲りあふれた川の幅は、とてもかれ等の今まで集めて持つてゐる藤と葛の蔓だけでは、その三分の一にも及ばないのは知つてゐた。しかし、兎に角最初の冒険だけでもやつて見やうと思つた。川の三分の一位のところ、一つ大きな岩石が聳えて立つてゐるが、そこまで行つて、兎に角足だまりをつくらうと決心した。

かれは服をぬいでサルマター一つになつた。

「危いな……君に、もしものことがあると、僕は何どうするんだ……」

「そんなことを言つたつて仕方がない。一緒に手を束ねて餓死を待つよりは、この方が好い」

「注意してやつて呉れ給へ」

「よし、よし」

かう言つて、蔓を片手に持つて、『君はそこにゐて、どンドン延^{のび}して呉れ給へ』
「切れると大變だな」

「大丈夫だ、よく見て置いたから」

かう言つて、かれは岸から渦き流れる濁流へと入つて行つた。見る見るかれの姿は深い瀬の中に入つた。

體の流されるにつれて、岸の蔓はすんずんと延びて行つた。商人の息子は、半ば恐れ慄^{おそ}いやうな心で、半ばその成功を祈るやうな心で、ぢつと眼も離さずにその水中の白い體に見入つた。

白い體は浮いたり沈んだりした。黄い濁流と白い肌とは巴^{うがま}渦を卷いた中に烈

しい戦闘をつゞけてゐるやうに見えた。岸に残つた青年は、その蔓——かれ等の生命のための唯一の蔓の切れないことを心から神に祈つた。

すんずん延びて行つた岸の蔓のお終ひになる頃には、その濁流の中の白い體は、三分の一の大きな岩にはまだ容易に達することが出来なかつたけれど、兎に角その手前の小さな岩に寄り附くことが出来た。

「もう、これでお終ひ！」

かう岸の方の青年は大きな聲で言つた。

岩の上に立つた青年は、いかにも勇者のやうに、又或る意志の表現のやうに勇しく其處に立つてゐたが、暫くあたりを研究した後、再びその白い體を濁流の中に投じた。しかし藤蔓があるので、歸りは流されずに、ぢき此方の岸に來ることが出来た。

「大丈夫！ 大丈夫！ もう安心して給へ。藤蔓さへあれば、向う岸に着くことが出来る。安心して給へ！」

いかにも喜ばしうな勇氣に満ちた男らしい聲を立て、裸體のまゝ青年は言つた。希望が歴々とその顔に輝いた。

「さうか、それは嬉しいな。行けるか」

「行ける、行ける」

「でもひどかつたらう」

「ひどいにはひどかつた」手拭で濡れた體を拭きながら、「始め飛込んで流れた時には、これはもうお陀佛だと思つた。君を残して死ぬのは残念だが仕方がないと思つた……。と不意に岩があつてね、それにつかまつて、ほつと呼吸をついたが、えらい流れだよ。迅いにも何にも……」

「さうだらうな」

「しかし、あそこまで行けば、もう占めたもんだ。もう目的がついた……。これからは藤蔓を探すんだ」

「しかし、まだ先に、もつとひどい瀬があるんぢやないか」

「それはある……。今、見て來たが、ひどい瀬がまだ三ヶ所や四ヶ所はある。しかし、君、意志だねえ。人間は意志だねえ。堅い大きい意志ならば鬼神もこれを避く。實際さうだ。何にも命がけだ。溺れて死んでも餓死しても死は一つだ。征服して見せる……。この荒川を征服して見せる！ 安心してゐたまへ」

「しかし、注意しないと駄目だ。蔓でもきれると大變だから」

「それはさうだ……。切れちやすぐ流されて了ふ……」

二人はしかし兎に角ある光明を前途に認めたやうな氣がした。成ほど友達の

言ふやうに手をつかねて餓死を待つよりも、危険であらうが、不可能であらうが、さうした努力をする方が本當だ、かう商人の息子の方も思つた。かれ等は萬事を捨て、藤蔓を林の中にさがした。

その仕事でその一日は暮れた。

しかし食糧はもう何も残つてゐなかつた。かれ等は一粒の米なしに寝なければならなかつた。それにも拘らず、かれ等は前夜の悲しく辛く氣も滅入つて了つたやうなのに比べて、別な人間かと思はれるほど強い新しい勇氣を感じた。藤蔓も幸ひにして少しはあつた。これで猶ほへこたれずに遠い林の中までもさがせば、川を横ぎるだけの材料は得られないことはないやうにかれ等には思はれた。かれ等は比較的穩かに眠ることが出来た。

翌日も矢張天氣が好かつた。朗らかに朝日は深く谷々へと射し込んで來た。

かれ等は餓ゑてゐるのにも頓着せず、朝起きるとから、すぐ藤蔓をさがしに出かけた。太い蔓を切るために、かれ等のナイフと小刀とはサ、ラのやうになつた。

『まだ、これだけぢや、とても向う岸までは足りないと思ふけれど、もう一努力して、あの真中の大きな岩まで征服して見ようか』

午近い頃、かう言つてかれ等は集めた澤山な藤蔓を背負つて、川の岸の方へとやつて來た。そこには昨日の午後に集めたものも積んであつた。かれ等は蔓と蔓とを結び合せる手数のためにまた一二時間をそこに費した。

谷は依然として濁流を漲らしつゝ、凄じい音を立て、流れてゐるが、最初の經驗に力づけられた辯護士の息子は、再び裸はだかになつてその激流の中に身を跳らせた。昨日の蔓があるのでその岩まではわけなく達したが、そこでかれは持つ

て行つた新しい蔓を昨日の蔓に結んだ。と同時に、これも矢張裸體になつた商人の息子が、蔓をたよりに其處の岩の處にやつて来て、昨日のやうに蔓を延ばす役目に當つた。

眼まぐろしい濁流の大きな瀬が其岩と真中にある大きな岩との間にあつた。辯護士の息子は勇しく蔓の先を體に巻いて、そしてその瀬に身を投すべく下りて行つた。午後の日影は明るくあたりを照した。

出 産

お政は此處に來てもう十日になることを思つた。何處を見ても知らぬ人ばかりである。また何處を見廻してもさびしい山ばかりである。山には松が並んで立つてゐて、それに毎日々日の影が長くさし込んで來た。臨月の體を怠るさうに長火鉢に凭らせて、ちつとそれに見入つてゐると、ひとり手に涙が頬を流れて來た。

そんな弱い氣で何うするんだらう。かう何遍となく滅入つた氣を引立てて見ても、それでも涙が出た。この山間のさびしい温泉場、此處でかうして獨りで産をしなければならぬといふことが、かの女に明かにそのやつた一年以來の

とを展ひらいて見せた。盲目であつた状態をも、人知れない歡樂に耽ひつた光景をも、または自然の報酬が餘りに早くまた餘りに觀面てきめんにやつて來たさまをも……お政は何うしてもその罪過を、その罪過の塊かたまりを、祕密に、世間や周圍の人達に知らさず獨りで處分しなければならぬ身の上であつた。かの女の夫は今も外國に行つてゐる。世間にも知られてゐる人である。一度この自分のふしだらが世間に知れると、それはもうかの女の一生の破滅である。かの女は妊娠にんしんと言ふことが知れて來た時以來、何んなにそれに就いて獨り苦んだであらうか。自から處決しやうと思つたことも一度や二度ではなかつた。お政は、その歡樂の相手の男にすら、自分の體のことを打明けなかつた。それは男の位置が、打明けたところで、單に自分の祕密を知られるだけで、何うすることも出來ないのを知つてゐた爲めでもあつたけれども、それ以上にかの女は世間を恐れた。名

譽を恐れた。自己の一生の破滅はめつを恐れた。

かの女はその時以來、其處の溫泉場、彼處の海水浴へと身を躲かした。一ところにぢつとしてゐると、すぐ素性を知られたり、多い女の友達にやつて來られだりするので、一月と落附いて同じところに滯留してはゐなかつた。かの女は、自分の周圍の人達には、唯、體がわるくつて爲方がないと言つて、または何處の溫泉も思はしい效能がないと言つて、其處から彼處へと移つて行つた。男は俄かに變つた女の態度を不思議にして、または甘い歡樂の思ひ出に引寄せられるといふやうにして、始めは手紙てがみを寄したり、恨みの言葉を並べたり、時にはぢかにやつて來やうとしたりした。一時はそれを免れるのが非常に困難であつた。しかし今ではすつかり自分の所在を男から晦くまして了ふことが出來た。お政は男から、「イマタツタ」といふ電報を手にして、慌て、そこから逃げた時のこ

とを思ひ出した。かの女は足元から鳥が立つたやうに荷物を整へて、もう夜であつたにも拘らず、急用が出来たやうに粧つて、急いで山際の停車場へ行った。今でもかの女はその立つた跡に着いた男の失望した顔と不思議にした表情とを想像することが出来た。

止むを得ないこと、は言ひながら、さういふ風に、父親をすら避けなければならぬ運命を持つて世の中に出て来やうとする腹の中の兒に對して、かの女はをり／＼涙を流した。三年ほど前に一度かの女は女の兒を生んだことがあつたが、それは弱い質で、病院に入れたり何かして、何うかして生命を取留めたいと骨を折つたに拘らず、一年も経たない中に小さな墓となつて了つたが、かの女は夫と偕にその可愛い小さい女の兒のために泣いて泣いて泣き盡した。かの女は腹の兒の動くのをちつと見詰めて、その小さい女の兒の魂がそこに蘇つて來てゐるやうな氣がした。

て來てゐるやうな氣がした。

この山間の温泉場にやつて來た日は、生憎、途中から雪になつて、これでは、汽車が着いても、其處から温泉場まで行く車があるだらうかと思つて心配した。窓から見ると、野も山も眞白である。春の初めの頃によく降るほた雪は五六間先きも見えない位に降り頻つて、さながらちぎつた綿か何ぞのやうに思はれた。しかし、親切に世話をして呉れた汽車の車掌は、停車場に着く前から、電話で頼んで置いて呉れたので、一臺の車は靜かに夕暮の雪を衝いて、段々山の中に入つて行くやうなさびしい路をこの温泉場へとかの女を伴れて來て呉れた。

かの女は此處に来る前にゐた温泉場で、臨月の紐を解くつもりで覺悟してゐた。ところが、ある日、向うでは自分を知つてゐないが、此方では知つてゐるある男が來てゐるのを發見した。それに、その温泉は世間に近すぎてゐた。新

聞の通信員などもをりをりはやつて来た。それに、かの女の大きな腹も宿での評判の種になりつゝあつた。汽車に乗つたり、車に乗つたりしては體にわるいのは知つてゐるが、落附いてゐられないので、神佛に手を合せるやうな心持で、またはこれで自分が死ぬやうなことがあつたら、それは何うも爲方がないといふやうな氣で、一生懸命になつてかの女は其處を出發した。

此處に来て、お政はほつと呼吸をついた。腹をさすつて見ても、子供にも自分の體にも別に異狀がなかつた。それに、その温泉宿には、僅かに一組か二組の客があるばかり、しかもその客は多くは自分等都會のものとは非常に縁の遠い田舎の人達なので、かの女は一種の氣安さを覺えた。思ひ切つてやつて来て好かつたと思つた。獨りで産をするのには理想的なところだとも思つた。かの女は三階の角の六疊に通されたが、隣りにもまたその隣りにも、客は一人もゐ

なかつた。普通の賑やかな温泉と違つて、女中達が餘りちやほやして呉れないのも却つて心を落附おちつかせた。

臨月で、子供がぐつと下にさがつてゐるので、大きな腹ももう大しては眼には立たないらしく、宿帳をつけにやつて来た番頭も、別に氣にも留めずに、莞爾たんねんとして、普通の挨拶をしてそして下りて行つた。

事實にぶつつかつて見なければわからない。行くところまで行つて見なければわからない。かういふことがある小説にも書いてあつたのをお政は讀んだことがあるが、それは實際さうであつた。百の心配、千の苦慮、何うして獨りで産の苦しみを切り抜けて行くことが出来るであらう、何うして知られずにこの自分のふしだらを處分することが出来るだらう。かう無限に苦勞にしてやつて来たことも、今愈々その瀬戸際に面して見ると、其處には、自から一種の強い

覺悟が出て来て、兎に角自分はそのを通らなければならぬ、生きやうが、死なうが、生むだけは生まなければならぬといふ風に考へられて来た。それに、かの女には一度その經驗があり、且つその經驗も、さう大して難かしくも辛くもなかつたので――。また、その他にも、田舎の人達の容易な産、獨りで生んで、獨りで取揚げて、翌日からは、もう立つて平日のやうに働くといふやうな人達の話も聞いてゐるので、一方では心配しながらも、一方ではいくらか樂に自から慰めることが出来た。と、“Abandoned”といふフランスの小説の女主人公が海岸のさびしい小さな茅舎で、波の音を聞きながら、産の苦しみをしてゐるさまなどが思ひ出されて来た。つゞいて、今、自分の生まうとする兒の運命――何うせ、人にやつて了はなけたばならない兒の運命、かうして半年以上も母親に苦しませ、心配させて、そして初めて世の中に出て来て來てゐながら、し

かも一生生んだ母親の顔をも知らずに過すであらうと思はれる運命が歴々と眼の前に描かれて来た。かの女はその小説の中の農夫にその兒の一生を發見するやうな氣がした。涙が靜かにかの女の頬を傳つた。

一軒しか旅舎のないこの山間の温泉場の人々の生活は、お政に種々なことを思はせた。段々聞いて見ると、この旅舎の主人は、土地では、殿様のやうで、財産家で、山は八百町以上も持つてゐて、温泉宿などをやらなくつても好いのであるが、代々昔からやつてゐると、湯の效能があるのでやめてゐるわけにも行かないので、人助けにやつてゐるといふことであつた。成ほどさう言はれて見ると、朝夕飯を運んで來る仕出屋夫婦も、かの女を停車場から乗せて來た人力車夫も、其他こゝに生活してゐる人達も、この旅舎の家族との間に、皆な主人と家來の間柄に似た關係のあるのをお政は見た。成ほどそれでかうした靜

かなのんきな気分がするのだと思つた。

お政は広い家屋の何處もがらんとして客のゐないのを見た。また、成ほど大盡らしく、庭の栽込なども立派なのを見た。池には舟が繋いであるのを見た。

かの女のゐる三階の室から、浴槽に行く間には、長い廊下、家族の住んでゐるらしい室、その室の障子はをりをり半分明いてゐて、中に、品の好い上さんが丸鬘まるまげに結つて、子供をあやしてゐるのなどを見た。そこを通り越すと、大きな冷泉を湛えて置く四角な槽があつて、時々その上のところ、番頭がポンプ仕かけて頻りに水を汲みあげてゐた。かなり長い間、その音があたりに靜かに響きわたつてきこえた。

そしてその大きな槽の正面には、捻れば冷泉が迸るやうなネヂがあつて、「飲料の外洗水に使用することお断り」と書いてあつた。お政は時には湯に暖つた

身をそこに寄せて、そのネヂを捻つて、迸るやうに出る水を鏈のついた眞鍮製の飲器しんちゆうせいに受けて飯んだりした。

「だつて、可愛い兒がゐるぢやありませんか」

「あれは貰兒です」

かう女中は言つた。

「さうですが、貰兒ですか」

かう言つたかの女は、やがて生れる自分の兒が、かういふ大きな世離れた財産家に貰つて貰へれば、それこそ何んなに幸福だらうなどと思つた。その考は不思議にも長くつゞいた。家族のゐる室の前を通る度にいつも起つた。親心とは不思議なものなどとお政は思つた。

來た翌朝は、まだ雪が降つてゐて、野も山も島もすつかり白く、樹々の枝は、

花の咲いたやうに綺麗に美しく見わたされたが、それが午頃から天氣になつて、空は藍あゐを溶したやうに碧く、明るい日影は平野から長くさし込んで来て、積つた雪は、時の間にばたばたと解けて行つた。トタン屋根に當る點滴は、ばらばらと音を立て、樋からは瀧のやうに流れて落ちた。

かの女は、年に比べて派手な縮緬の羽織をあたりに際立たせて、欄干に凭つて、その逸早く解けて行く雪を眺めた。

次第にお政は周囲の人達と懇意になつて行つた。一番最初は、老いた女中で、それから眼の縁りにひつつりのある若い方の女中とも氣の置けないやうな話をした。仕出屋の上さんとは次のやうな話をした。

「矢張、込むんですか、夏は？」

「え、え、もうそれは——、一間に三人も四人もゐることがありますで」

「ぢや、今が一番ひまな時なんですね」

「さやうです」

「産婆さんはありますか？ 此處に？」

「此處にはをりませんけれど……ぢき、近くの町にゐます」

「町つて遠いの？」

「何アに、一里もありませんや」

「まだ何でもないんですけれど……」

かう言つて、言ひかけたことを半分で止して了つた。

「いつでゐらつしやるんです？」

「まだ二月、三月……」

かの女は言葉を濁した。わるいことを訊いたと思つた。

「此處等では、矢張、その産婆さんを頼むんですか」

「何んの……産婆さんなんか此處ぢや入りますもんか。皆な近所の年寄衆が行つて取揚げますで！」

「田舎は簡單だねえ」

「何んの、田舎では、お産なんか、何とも思つてゐませんで……」

「さうだつてね」

「二三日前にも、前の車夫の上さんが産みやしたが、今日はもう起きて働いてゐますでな」

「田舎の人はきついね」

こんな話をお政はした。女中にしても、仕出屋の上さんにしても、もう臨月だと思つてゐないらしかつた。また、臨月で、かうして温泉場などに來てゐる

とは誰にも思へなかつた。

貰ひ兒だといふ旅舎の女の兒などもかの女は口をきいた。庭をぶらぶら歩いてゐる處へ、丁度その女の兒がやつて來たりなどした。かの女は袂から菓子などを出してやつた。それはまだ數へ年の六つになつたかならないか位で、可愛くおカツバにした、人なつっこい質で、いろいろなことを言つた。「さうなの？ 學校へ來年から行くの？ それぢや、お辨當を母ちやんに拵へて貰つて持つて行くんですね」かうお政は言つた。

天氣の好い日には、その派手な縮緬の羽織を着たお政の姿は、彼方此方に見えた。時には仕出屋の前ところに立つてゐたり、鞆がまんこの前にほんやり何か考へるやうにしてゐたり、林に沿つた路を池の方へ歩いて行つたりした。春はまだ淺かたつけれども、山ふところになつてゐる土地は、平野を吹き荒す西風も

やつては来ず、咲き過ぎて白くなつた梅がそこにも此處にもあらはれて、いかにも靜かな春の氣分をあたりに漲らせた。路傍の草などももう青く萌え出してゐた。

『さうだ……。心配することはない。その時には屹度村の年寄がやつて来て世話をして呉れる……』

歩きながら、ふとお政はこんなことを考へた。と、いろいろなことが巴渦を卷いたやうに起つて簇つて來た。男の顔があらはれて來る。つゞいて世間があらはれて來る。周圍の者や、親戚のものは誰も知つてゐるものはないのであるが、唯友達の一人在知つてゐるまでは行かなくとも、いくらか勘付いてゐるはしないかといふことが氣にかゝり出した。

ふと海外にゐる夫の顔が見え出して來た。こんなことを少しも知らずに、此

方の病氣を心配して、この前ゐた温泉場へも手紙がはる／＼届いて來たが、それを思ふと、過ちとは言へ、かうした身になつた自分が悔いずにはゐられなかつた。かの女の身に取つては、世間には知られたくないが、如何やうにしても、身が減びても、それだけは何うしても拒がなければならぬと思ふが、夫には——歸つて來た夫には、この事は打明けずには置けないやうな氣がした。何うか、過ちだと思つて、これだけは許して下さい。かう言つて泣いて縋つたなら、夫は許して呉れるだらう。自分でも、この爲めには、身も魂も亡びるやうに苦しんだのだから、何うかそれだけは胸に疊んで置いて許して下さい……。かう言へば、屹度許して呉れるだらう。『しかし、しかし……』かう思つてお政は下唇を咬んだ。

この心の衝突は、これまで度々起つて、そして度々解決がつかずに、いつも

そのまゝになつて了ふのであるが、今日も矢張り、肯定する心と否定する心とが、秤はかりにかけて何方にも偏らない程度でかの女の胸の中を往來した。夫は許して呉れると言つても、果して本當に許して呉れるだらうか。許され得ることだらうか。男の身として許され得ることであらうか。矢張そのまゝに深く自分の胸にかくして持つてゐる方が賢い爲方ではないか。自分の身の安全を期するには、その方が好いのではないか。かう思ふと、夫と自分の間に、打明けても、または隠しても、何うしても、醸されて來る心の暗い距離を悲ますにはゐられなかつた。そればかりではなかつた。隠して置くとする、一層わるいことがかの女の心の奥に惡魔あくまのやうに暗い影をひろけて來るのをかの女は感じた。他でもない、それは隠しおほせたとした曉に起つて來る男に對する祕密の關係の連續れんぞくである。恐らく、さうした場合には、かの女は矢張男とその關係をつゞけ

るに相違ない。再びさういふ眞似はしまいと思つてゐても、隠してゐる以上、矢張さうなつて行くに相違ない。では、矢張夫おつとにそれを打明けやうか……。かの女は歩きながら思はず溜息ためいきをついた。

かの女はいつか池畔に來てゐた。それは山裾に鏡のやうに湛えられた丸い池で、周圍に樹がないために、あつても今は落葉して空しくなつてゐるために、日影が晴れやかにさし添つて、明るいのだかな春らしい感じをあたりに漲らせてゐた。滑かな水の上には、小波も起たらず、林の影が靜かにそこに落ちて、山の裾には、梅の花の白くかたまつて咲いてゐるのが指さされた。

かの女はほんやりして長い間其處に立つてゐた。其間に百姓が此方を見い見い通つて行つたのも、車が一臺湯治客を乗せて靜かにその傍を輾まつて行つたのも、またはついその上の山の斜阪しゃはんで、村の百姓達が五六人集つて、をりをり懸

聲をして大きな松の樹に鉞^{きさかり}を打込んでゐるのを、子供が一人二人何か戯れながら通つて行つたのを、何も彼もかの女は知らなかつた。かの女の心は遠く海外の旅舎にさびしく暮してゐる夫の姿を描いたりまた消したりした。

「いつそ死んだ方が——」

かうした思ひがだしぬけにかの女を衝いて起つた。しかしそれは以前度々起したやうな烈しい張詰めたものではなくて、とても出来ないことを、實行の出来ないことを、または觸つて見て自分で自分を客観するに似た心を起させたばかりで、別に深い何等の反應をも呼び起さなかつた。以前のやうに、腹の中に生きてゐる子供が可哀想だとも思はなかつた。氣が附くと、かの女は池の隅^{すま}に浮んで泳いでゐる家鴨^{かひる}の群をちつと唯見詰めてゐた。暫くしてかの女は靜かに歩いて温泉場の方へと戻つて來てゐた。

179

無論、罪はかの女にあるのである。たとへ如何なる誘惑がこの世にあつたらと言つて、かの女すらしつかりとしてゐれば、保護する夫がゐなくとも、さうした事件^{じけん}は起らなかつたのである。しかし、思ひ詰めては、かの女はその罪を悔ゆると共に、男性の保護の下^{もと}でなくては、一刻も危険なしに生きて行くことの出来ない女性の弱さとあはれさとを思はずにはゐられなかつた。夫さへるれば、無論かうした不自然な苦悶や不幸は起らなかつたのである。睦^{むつ}じい家庭の團樂をつゞけて行くことが出来たのである。いかなる歡樂の惡魔もその乗する罅^{すき}隙を見出すことが出来なかつたのである。さう思ふと、夫がゐないといふことが、または横濱の埠頭^{ふかど}に送つて行つて、別れを惜しんだといふことが悔まれた。つゞいて盲目^{めくら}に歡樂に陥つて行つて、後も先も忘れ果て、唯だ夢のやうに送つたその時のかの女の狀態が振返つて考へられた。妊娠と知れるまではかの

女は恐ろしい罪惡を犯したといふことすら殆ど頓着しなかつたのであつた。『いくら思つたつて際限がない。思ふまい、思ふまい……。夫の歸つた時に、またその時に考へやう』

かの女はつとめてその問題を打消すやうにした。

一日は一日と經つて行つた。仕出屋の上さん、尖つた神經性のきよんとしたやうな顔をした亭主、二人して代る代るに運んで來る朝夕の食事、豆腐汁、玉子焼、わる甘い鱒マスの煮附、硬いしんのあるやうな飯、その箸を一度取れば取るだけ、かの女の前にした暗い壁は次第に近寄つて來るのであつた。下では蓄音器が終日長く、そんなことは何處にあると言はぬばかりに、のんきに流行おくれの唄を鳴した。

お政が湯から出て來ると、廊下にゐた番頭は莞爾ニヒクして會釋した。誰にも彼に

も、二組三組滞在してゐた客にも、旅舎の品の好い上さんにも、お政は此頃では懇意になつてよく口をきいた。表面では、お政は世間のことに明るい、氣さくな、また快活な、話し好きな女に見えた。しかし、そのお腹の大きいと言ふことが、またさうした體で、附添の人もなしに、かうして旅にゐるといふことが、次第に人々の噂の種になつた。下にゐる田舎の百姓の夫婦づれは『八月、か七月だつて、そんなことはねえ。もう、かれこれ臨月だんべえや。あの下腹のさがつてゐるのを見たつてわからア』などと言つた。旅舎の上さんは上さんで、『お産をしに來たんぢやないかな、それにしちや、誰か來さうなもんだが、あのお客のところには、手紙でも東京から來るかや』いくらか氣にして、そんなことを番頭や女中にきいた。

ある日は、客同士が湯の中でその噂をした。

「さうかも知れねえな」

「てつきりさうだぜ」

かう言つて大きく笑つた。

「いたづらの塊かたまりにちげえねえ。でなくつちや、あんな大きい腹をして、湯治に來てゐるわけはねえ。一人でこつそり生む氣に違えねえ」

「好い容色だしな、あれぢや男が放つて置かねえや」

「猪食ぶくつた酬むかひひか、あは、」

また大きく笑つた。

旅舎でも、そのまゝ放つては置けないので、それとなしに、女中に種々なことを訊かせた。しかし、かの女からは、何等の内容も得ることは出来なかつた。「なアに、まだ、そんなことは大丈夫ですよ。その中、東京から人が來る筈だ

から」などとお政は言つた。

一日増しに、あたりは春はるめいて來てゐた。林はまだはつきり芽めぐまないけれども何處となく濃い影を帯び、脊戸にある紅い桃は咲き、周圍には青草が萌え、生れ出づる力はそことなく生々いきくとして天地に漲り渡つて來てゐた。向うの松の並んだ低いなだらかな山には、夕日が長くのどかにさし込んで、丘から丘に通ずる路には、人の影は見えずに、唄つてゐる聲ばかりが靜かにきこえた。

その日は朝から好い天氣てんきであつた。いくらか氣候は寒かつたが、空は碧に、風は絶えて、雲雀の揚る聲が終日のどかに空に聞えた。午前の中は、お政の姿は鞆ぶらんこのあるあたりにもちよつと見えてゐたが、午後からはすっかり一室に閉ぢ籠こもつたきりで、いつも入りに行く湯にも姿を見せず、女中が行つた時には、小搔こかき卷まきをかけて、靜かに横になつて寝ねてゐた。けれども別に變つたやうな様子もな

く、それに丁度その時、新しい浴客が二組三組やつて来たので、女中達はそつちの方に忙しく追はれて、つい行つて見る暇もなかつた。やがてその日も静かに暮れて、いつも閉湯を報ずる七時の拍子木が音高くあたりに響いてきこえた。その頃になると、近所に住んでゐる人達は、皆な手拭を持つてぞろぞろとその浴槽へと出かけて行つた。かれ等はいつも皆なさうして仕舞湯を貰ひに行くのであつた。荒れた唇、大きなだらりと下つた乳、箒のやうにぐるぐる巻きつけた臭い髪、額髪を汚れた手拭で巻いた子守、ギャアギャア泣き喚く子供、そこに薄暗いランプの光が混雜した浴槽の光景をほんやりと展けて見せた。

突然、年を取つた方の女中があたふたと扉を明けて入つて来たが、

「作さよこの婆さんゐるかね」と言つて叫んだ。

誰も皆な其方を見た。

「作さよこの婆さん——」

「あゝゐるだよ、此處に」

かう言つて、その婆さんは大勢の裸體の中から萎びた乳をした體を持あげた。

「早く来てお呉れよ。お客が産氣がついたから」

「え？」

婆さんは耳を疑ふやうにして、此方へと出て来た。

女中は今度は小聲で話した。「さうけえ、さうけえ」と言つて婆さんは立つて聞いているが、『めづらしいこんだな。湯治のお客さんが、産氣がつくつて言ふのは？ 早産かな？』

「さうぢやないやうだよ」かう女中は早口に言つたが、『来てお呉れよ、早く……』

家に歸らねえで、すぐな』

『かしまりやした』

で、女中は出て行つた。

『あゝ、それぢやあの衆だ……。そら、縮緬ちぢめんの羽織を着て、大きな腹をして、そこら歩いてゐたりあの女衆だ』

かう誰か言ふと、

『さうだ、それに違えねえ』

皆な口を合せるやうにして言つた。一時は浴槽の中はその噂でまたガヤガヤした。笑聲なども雜つてきこえた。

着物を着改へて急いで婆さんが出かけて行つた時には、お政はもう少しさつき、女中に負はれて、辛うじて三階から下の座敷に下りたところで、ちやんと

蒲團ふとんに凭りかゝることが出来るやうにして貰つて、一二時間の苦痛に壞れた髪を此方に見せながら、微かに呻聲うなりこゑを立てゝゐた。『お婆さんが来たから、御安心なさいよ』目にひつつりの出来てゐる若い女中は、かう言つて産婦に力を添へた。生れる力に伴つた陣痛は催もよほして來た。